

狸藻科

むしとりすみれ

列當科

おぼく

茜草科

きぬたさう

忍冬科

りんねさう

敗醬科

みやましごれ

みやまぐわがた

おほほみそほづき

きばなのかはらまつば

きんぎんぼく

はくさんさみなへしかのこさう

きとこへし

をみなへし

桔梗科

いはまゝやう

ちしままゝやう

ひめしやじん

菊科

たかねよもぎ

みやまかうぞりな

うすゆきさう

たかねうすゆきさう

みやまうすゆきさう

はがな

かうぞりな

あまのきりんさう

たうひれん

やはぎひごたへ

いはいんちん

やまのこぎりさう

やまはゝこ

もみじはぐま

ひとつほよもぎ

やまぢぎみ

かうもりさう

ちやうじぎく

きんぐるま

はんごんさう

さばぎく



よぶすまざり  
ふじあきみ

えぞむかしよもぎ

みやまあづまぎら

### 日本アルプス三大横断

鳥嶺

#### 一、日本アルプスとは何ぞや

日本アルプスなる名稱は、チャムパレン氏ウエストン氏等によりて唱導せらしものなり。而して其の範圍に至りては、人々によりて多少其の見を異にす。志賀重昂氏は、

日本アルプス山は越後越中の境上より飛騨信濃の間に延縁せる日本々島の中央に盤踞せる大山塊にして南北三十五里東西二十里花崗岩帯と片麻

岩帯との間に劈入せる火山岩帯を合せ三岩帯の錯交するところ日本國中の眞成なる「深山幽谷」をなし「石劍鑽背」の四字は實に此區域を代表せりと説かれ。日本山岳志の著者高頭式氏は、

余が所謂日本アルプスと臆断するものは越後糸魚川より姫川を浜りて越後後に入る青木中綱木崎の三湖を経て大町を過ぎ高瀬川に順ひて松本に出て夫れより奈良井川に従ひ鳥居峠を越え木曾川に沿ふて美濃に降り太田町より轉じて飛騨川を遡りて飛騨に進み高山より船津を貫き神通川を下りて越中に入り更に富山より國道を取り親不知の險を過ぎて糸魚川に臨る此間の連嶺重嶺を指すもの云々

と。而して余の見るところは大に異れり。即ち以上二氏の所謂日本アルプスと稱する地域に加ふるに木曾山系及赤石山脈を以てせんと欲するものなり。而して飛騨山脈は之を北部日本アルプスと呼び木曾赤石兩山脈を南部日本アルプスと呼べんとす。本邦唯一の山岳雜



誌山岳は、其の第三號に於て日本アルプスの卷なる題下、駿州田代山奥  
 横斷記及甲州鳳凰山と地藏岳の記事をも加へたるを見れば、日本アル  
 プスの範圍に於て余と見を同じうするものならん。ウエストン氏は  
 巖に日本アルプス登山探検記を著はし、主として飛驒山脈を記述し、又  
 ロンドン地學協會雜誌に南部日本アルプス探検旅行記を投じ、主とし  
 て赤石山脈を記述せしを見れば、日本アルプスを南北に區別する余が  
 見に首肯せらるゝならん。  
 看よ北緯三十五度三十分より全三十七度に達し、東經百三十七度より  
 全百三十八度に至る間、山勢斜に西南より東北に赴き、蜿蜒起伏せる千  
 山萬嶽を。これ北部日本アルプスの連峰にあらずや。  
 北部日本アルプスの連峰は、實に左の諸峯を包有す。  
 東 俣 嶽 (信濃美濃) 約二〇〇〇 米突

御 嶽	朽 洞	乘 鞍 嶽	硫 黄 嶽	燒 山	穂 高 嶽	槍 嶽	笠 嶽	鷲 嶽	黒 嶽	霞 嶽	徳 本 峠
(信濃飛驒)	(全)	(全)	(全)	(全)	(全)	(全)	(飛驒)	(越中信濃)	(全)	(信濃)	
約二〇七五	約二〇〇〇	三〇二五	約二〇五三	約二二〇〇	三一〇〇	三一七八	二八九七	約二八九六	約二八八八	約二八四三	約二五二二



横	上	五	雪	鉢	朝	白	杓	鍵	大	鹿	乘
	ノ	郎	倉	ケ	日	馬	子	ケ	黒	嶋	鞍
嶽	嶽	嶽	嶽	嶽	嶽	嶽	嶽	嶽	嶽	嶽	嶽
(越中飛驒)	(越中飛驒)	(全)	(全)	(全)	(全)	(全)	(全)	(全)	(全)	(全)	(全)
約二二〇〇	約二六五六	約二五〇〇	約二四八五	約二四〇〇	約二四〇〇	約三〇四一	約二九二三	約二八七八	約二八〇〇	約二五〇〇	約二七三〇

祖	後	蓮	針	五	有	燕	屏	大	常	蝶	鍋
父	立	華	木	六	明		風	天	念	ケ	冠
ゲ	山	嶽	峠	ケ	山	嶽	嶽	井	嶽	嶽	山
嶽	山	嶽	峠	嶽	山	嶽	嶽	嶽	嶽	嶽	山
(全)	(全)	(全)	(全)	(越中信濃)	(全)	(全)	(全)	(信濃)			
約二四〇〇	約二〇〇〇	約二五〇〇	約二四九三	約二五〇〇	二二六七	二七六一	約二五〇〇	二九二一	二六六一	二六六三	約二四四〇



薬師ヶ嶽	(越中)	約二九九二
佐良峠	(全)	約二三四九
龍王嶽	(全)	約二四〇〇
浄土山	(全)	約二四〇〇
立山	(全)	約二九三六
富士ノ折立	(全)	約二九〇〇
大日嶽	(全)	約二六六七
剣ヶ嶽	(全)	約三九〇〇

以上は主要なる者を挙げたるのみ。  
 南に方りては御嶽北にありては白馬嶽東にありては大天井西にあり  
 ては越中立山これ北部日本アルプスの四本柱。而して中央に聳ゆる  
 槍ヶ岳を加へて余は北部日本アルプスの五峰と呼ばん。何れも一萬

尺内外に出入する崇嶺高岳。  
 南北凡五十里東西約二十里の北部日本アルプス山地多くは之れ無人  
 の境人跡曾て到らざる深山幽溪此非人園を横断せる数條の樵路あり。

1. 白馬越
  - 信州北安曇郡北城村——細野——二股——白馬尻——白馬頂上——蓮華鑛山
2. 針木峠
  - 信州大町——野口——丸石小屋——針木峠——川田小屋——黒部
  - 佐良越——立山温泉——松尾峠——追分——立山室堂——芦峯寺——上瀧
  - 熊仆——大谷——アワス——小見——松本

上瀧



富山市

3. 槍ヶ岳越

信州松本 — 島々 — 徳本峠 — 上高地 — 槍ヶ岳 — 有峰 — 才覚地

船津 — 安房峠 — 白骨 — 安房峠 — 平湯 — 今見 — 船津

松本 — 島々 — 大ノ川 — 白骨 — 安房峠 — 平湯 — 今見 — 船津

川村 — 高山 — 野麥峠 — 野麥 — 上ヶ洞 — 中ノ宿 — 高山

6. 長峰峠 — 野麥峠 — 野麥 — 上ヶ洞 — 中ノ宿 — 高山

7. 御嶽越

福島 — 開田 — 長峯峠 — 阿田野郷野麥峠道に合す

福島 — 王滝 — 御嶽 — 濁川温泉

通路と稱するも野麥峠を越ゆるの外は多くは樵路たることを忘るゝ勿れ。時に数日の食料と露宿の用意となし、信任すべき案内者及數人の人夫を率ひざるべからず。

北部日本アルプスを跋渉する趣味ある方法二あり。一は前述の數路によりて北部日本アルプスの連嶺を横斷するもの、一はこの連峰を峰傳ひに縦走すべき破天荒の壯舉。

第一は確實なる案内人と十分なる準備あらば直に實行することを得べし。第二の方法は其の可能なるや否や之れが明確なる回答を與ふることを得るもの殆んどなからん。余は第一の方法を取り、北部日本



アルプス三大横断を决行せり。

### 二、第一回横断 (白馬嶽裏山越)

日本アルプス紀行に下界の記事書くも懶く讀むは又猶更の事なれば、吾が筆は余が馬車と共に北越街道を疾驅せん。明治丙午の年八月三日越後三島郡なる高頭氏の邸を出て、來迎寺停車場より乗車し直江津に達し、之れより糸魚川に向ふ。馬車は一頭立六人乗り、一行は高頭海峯大平晨の二君及渡邊氏。原田博士の所謂飛驒山脈乃ち北部日本アルプスの連峰信越の境上を北走し立山群峰、白馬連峰となり、其の北海に臨むところ日本海の怒濤之に激し親不知の斷崖となる。北越街道は海に瀕せる斷崖の中腹を西走せるもの故に左は見上ぐる一帶の峻

嶺右は斷崖の下波濤の碎くるを見る、岩石の堅硬なる部分波浪の浸蝕に抗するところ海中に突出して岬角をなし、二岬角の間に灣入せる曲浦あり。

右に一岬角を廻れば左に一灣あり、灣底には即ち荒村破驛を見る。

一岬角——一小灣……一荒村。

千篇一律、北越街道は車上半日にして倦めり。道曲折多けれども高低少なく、坦々として富山に向へば、波浪の激するとき親子相顧みるの邊なき親不知の峻絶も今は大道如砥如矢。

名立驛にて午餐を喫し、能生梶屋敷等を過ぎて午後三時半糸魚川に着す。直江津より十有二里、此日朝來曇天、午後に至りては雨雲漸く低く、屢々細雨の至るを見る。天候不良の爲め、白馬連峰の後影を撮影せんと、の多年の宿望遂に畫餅。



糸魚川より又馬車にて根小舎に向ふ。根小舎は糸魚川を距ること三里道は姫川の流域に沿ふ。糸魚川より一里弱の間は、大道直うして髪

の如し。路やがて姫川の谷に入るや、川に沿ひ崖に縁り透迤曲折を極む。谷愈々狭くして、山漸く高し。左方は半峰以上濛々たる白雲を以て蔽はれたる絶崖奇石怪岩の參差たるもの、眉宇に迫まり、幽凄の氣自ら神を壓するものあり。右方の断崖直に姫川の岸となる。姫川の流れ或は深潭となり或は急瀬となり、雨餘の水肥えて稍溷濁す。曲折極まりなく高低一定せざる難道、馬車は前後左右に動搖して屢々膽を冷せり。谷開けては水田桑圃を見る、或は塞がりて道の窮せるを思ふ。午後六時半、炊烟透迤たるころ二三の人家あり、馬車爰に止まる、これ吾が行の宿泊すべき根小屋なりと。余は意外に其の僻陬なるに驚けり。

はもとより粗糲。旅宿を山本屋と稱す、落鞋を解きて階上に登る、低き天井不潔なる墨飯根小屋は姫川谷と根知谷との合點にあり、根知村の村落は根知谷にあり、根小屋は根知村の一小部落なり。往昔にありては此姫川谷は西部越後と信州とを連絡する唯一の交通路たりしを以て越後西頭城一帯の海産物等は、皆此通路によりて信州に運ばれたるなり。されば汽車の直江津より長野に通ぜざる以前にありては荷物の運搬、旅客の往復頗る頻繁にして繁昌を極めたるも今は全く昔日の面影を存せずとは山本屋の主人安吉の述懐談なり。夜に入りて天候益々不良の兆あり、乃ち十分防水の準備をなす、十時寝に就かんとせしに蚊張破綻して用を爲さずしかも蚊群大擧して至る、止むを得ず家人と共に之を補綴す、大小無數の破れ目悉く塞ぐ能はず、



爲めに高頭氏の如きは通宵一睡たもせられざりしと云ふ。  
 第二回白馬登山の際風雨の災に遭ひ困苦を極めし辛き経験は夢寐だ  
 にも忘るゝ能はず。其第四回登山に際しても天候の如何を憂慮せし  
 こと尠ならず。此夜も夜半松嵐溪聲を聞きて驟雨かと驚き覺めし  
 こと實に三回事。  
 四日午前五時三臺の人車にて山ノ坊に向ふ根小屋より三里の行程な  
 り。天候前日の如く陰雨漠々容易に晴れず上流に進むに従ひ清紫玉  
 を欺く姫川の流廻曲盤旋奔湍岸に激し岩に碎くる有様壯絶を極む。  
 兩岸の絶壁削るが如く將さに帽廂に崩れんとする怪石奇岩或は既に  
 路上に墜落して半ば地中に埋れ前程を遮るの盤石あり或は屋の如き  
 巨岩河中に轉落せるものあり。車夫は指して之れ袴岩烏帽子岩と稱  
 す皆形によりて名付けたるもの。海岸を距ること僅々數里にして既

に深山幽溪の趣きあり。  
 岩壁にシナノナデシコの盛に開花せるを見る信州の特産なりと稱せ  
 られしも甲州に於て其の産あるを聞き今又此地に本種を見る。  
 根小屋より進むこと一里半西山橋あり路之れより姫川の左岸に沿ふ  
 七時赤岩平と呼ぶところに達す此所にもシナノナデシコの盛に開花  
 せるを見る。姫川の對岸は既に信州北小谷村の地域なり。下河原と  
 稱するところに路傍の湧泉を掬ばんとせしに岩面ヒモカツラの繁  
 殖せるあり本種は其の産多きものにあらず長野附近にありては戸隠  
 奥社に其の産あり。  
 余を載せたるは五十歳前後の老車夫行く／＼其の語るを聞けば。  
 一此越後街道は明治二十年起工して全廿二年竣工し盛なる開道式  
 を舉行し全二十四年に至り所々改造して不便を除き今日の新道



となせしなり。

二 蓮華山は周回五十餘里山麓の民も其の頂を極めし者少なし客今

此崇嶺の頂を極めて信州に越えんとす恐らく之れ天狗の業。

三 此越後街道は糸魚川を起點とし姫川に沿ふて信州に入り大町池

田を経て松本に達するもの往昔旅人の往復多かりしも今は行人

稀なるが故に先頃之れより三里半程の前程に於て白晝送人追

劊の爲めに殺害せられ郵便物を奪はれたれども未だ其の罪人縛

に就かず。

四 蓮華温泉は路遠きにもかゝらず常に數十名の浴客あり湯は花

柳病に特效ありと稱せらる故に壯年の者が山麓の村落に於て蓮

華温泉浴を尋ねるときは侮蔑冷笑を以て迎へらるゝを常とす。

五 山ノ坊より半里程の所登山路に當りて大所と稱するところあり

往昔山岸豊後守と稱する豪士あり蓮華金山の所屬を争ひ信州人  
と公事をなし江戸に上ること九十九回百回目に遂に毒殺せられ  
たれども金山附近は遂に越後の領域となる。

午前八時山ノ坊に達し爰にて人車を返へし登山の準備をなす。休憩

せしは朝野屋なり田舎の常として呉服雜貨飲食物等あらゆる物品を

販賣す。朝野屋の隣家に前夜吾等が宿りし山本屋式の旅店あり他日

此道より登山するもの爲めにはかるに第一日可成的此山ノ坊に達

して一泊すべし而して第二日蓮華温泉に達するときは中途に於て悠

々十分なる觀察を爲すことを得べし。尤も健脚にして中途に植物採

集等の必要なものは糸魚川を未明に發して一日にして温泉に達す

ること難きにあらす。糸魚川附近の人にして湯治の爲めに登山する

ものは皆一日にして達するより。前夜も夜半根小屋の旅宿前を通過



して温泉に上りしもの數名ありき。  
 朝野屋にて莫蔭草鞋其の他二三の必要品を求め猶ほ主人をして温泉  
 に至るべき人夫三名を雇入れしむ戸數僅に十戸許の所なれば戸毎に  
 尋ねし模様なりしも男子は皆野に出て、家に残れるものなし、由て止  
 むを得ず大所にて人夫を雇ふことゝなし、三名の婦人に荷を擔はしめ  
 八時三十分出發す。  
 少しく進みて姫川の支流大所川の橋を渡り右方の岐路に入り大所に  
 向ふ。陰雲益々濃密白雲前途を塞ぎ、天候頗る險惡なり。九時大所に  
 達す。山ノ坊より半里海拔約三百六十米突、山岸某の家に着し再び人  
 夫雇入の事を依頼す家人頗る朴直親切吾等の爲めにしきりに四近を  
 奔走して人夫を求む、然るに此附近の若者は多くは蓮華の鑛山に登りて  
 家にあらず、僅に山ノ坊の者にて久保田某なる一名の人夫を得たるのみ。

余等大に窮す止むを得ず又木地に到り人夫を雇入することに決し、久  
 保田某及山岸方の老人及小兒をして荷を負はしめて出發す。午前九  
 時四十分細雨霏々として衣袂悉く潤ふ、此附近全く平地なく、水田桑圃  
 盡く山に依る。農家の構造も深雪の地とて他と大に異なるを見る。  
 木地は一名木地屋とも呼ぶ、皆屋背の石田數歩を耕やし、蒲衣糲食する  
 もの、冬季は多く挽物の木地を作るを生業とす、よつて此名あり、もとよ  
 り山中の小部落に過ぎず、戸數も數戸を認めしのみ。此所より全く無  
 人の境を行くことなれば、若し此地に於ても亦人夫を雇入すること能  
 はざれば登山不可能なり。小掠某の家に至る家には老婦と小兒のみ  
 なりしが、主人は近傍の水田に居りしを以て呼び來たり、又々人夫二名  
 雇入の事を托す、快諾して馬公及虎公共に姓小掠の二名を得たり。此  
 家にて若干の白米を購入す、人夫は簑笠に身を固め、吾等は草鞋の緒を



固ふし雨を侵して出立す。雨中の登山壯は頗る壯なりと雖も不便不  
 愉快極まりなし。雨中の登嶽畢竟これ愚人の擧。  
 木地より進みしこと僅々二三町にして路既に喬木帯に入る、ハンノキ、  
 プナ、オナラ、トチの巨幹例の如く、朽葉脚を没し太古の儘なる大森林雲  
 霧の爲めに鎖されたれば未だ午後一時ならざるに暗くして日將さに  
 暮れなんとするもの、如し。沮洳の地にはミヅバセウの壯大なるも  
 の恰も窓前の芭蕉の如く、滞水の面にウメバチモの白花を見る。八丁  
 許にして魚池と稱するところあり、魚池より十二三丁にして井モリの  
 池あり。喬木森々たる山隈に一面の明鑑を見る、水は凝て油の如く、漱  
 澂を認めず、時々葉末の露の墜ちては小波紋を呈するを見るのみ、小鱗  
 介の游泳を認めず、一水草の開花せるなし、疑ふらくはこれ山神の愛護  
 する白蛇の此底に眠れるにはあらざるか、實に森殿幽冥深沈、凄愴の氣

冷濕なる大氣に融合して我が身邊に迫るを覺ゆ。池を後にして進む  
 しかも何物か池中より出て、我が後を窺ふが如き心地す。井モリ池  
 より少許にして源左衛門アハラに至る、ミヅバセウ、ヨブスマサウ等の  
 偉大なるものあり、二枚を撮影す、此等草本の發生盛なる何人も此畫印  
 を見て驚かざるものなし。源左衛門アハラより進むこと七町許にし  
 て忽ち輕蹄の聲を聞く、之れウト河なり、水清冽玉の如し。ウト河より  
 八九町にして八町坂あり、八町坂より半里冷水と稱する地あり。此邊  
 より喬木の種類少しく變じ下方に於ては主として濶葉樹林なりしも  
 漸々ツガ、モミ、クロメ等の針葉樹を見る、水ゴケの繁茂せるところ、食虫  
 植物モウセンゴケの一面に開花せるあり。冷水より半里カゴ落しに  
 到る時既に五時四十分一行頗る疲勞の色あり、余乃ち疾驅して數町の  
 峻坂を降り、彌兵衛河を渡り、三丁許にして蓮華温泉に達し、事務所の隣



室を宿所となし食事其の他の準備を命ず暫らくして一行皆至る。

中

蓮華温泉は海拔約千七百米突の所にあり。木造浴舎四棟あり、檜低く  
室狭く、一棟には事務所炊事場及余等の宿泊せし一室あり。其の右の  
一棟は浴室にして總湯及仙氣湯の二槽あり。他の二棟は各三四の客  
室あれども何れも陋隘不潔なり。余等の宿泊せし事務所の隣室と雖  
も唯木床に一枚の蓆を敷きたるのみ。余は入浴せんとして浴槽に  
至りしに總湯及仙氣湯なる名を見て其の名醜なる仙氣湯は花柳病患  
者等の入るべきものならんと獨斷し之を避けて總湯に入る。歸りて  
事務員に質せば仙氣湯は効少なく患者は皆總湯に入ると余これを知  
きて全身の悶痒きを覺ゆ乃ち走せて再び仙氣湯に入る。夜に入りて

雲收まり欄干たる星斗の頭上に近きを見る、今宵こそ陰曆十五日實に  
月蝕皆既を見るべき夜なり、時刻をはかり庭前に出て、大空を仰ぐ、  
浴客皆出て来る、衆多くは月蝕を見て摸拜するの迷信家のみ、漸くに  
して復圓し、衆皆室に歸る。余獨り庭前を逍遙す、事務所の背後一二丁  
の處より、月光に映じて白煙の搖曳を見る、これ元湯にして、其の上方薄  
鼠色の大塊はこれ薬師のオネ又其の右方に突兀たる觀音ピシあり、吾  
人の所謂蓮華或は小蓮華此地方の人々の乗鞍と稱するものは此山陰  
にありと聞く。觀音ピシの右方に淡はく見ゆるは之れ鉢ヶ岳雪倉赤  
男白高地ミツゴゼ等の連峰なり。峰に残れる白雪夜目にもしるし、下  
界にありては氷を呼ぶべき此夕山氣肌に沁して久しく屋外に止まる  
べからず。  
硬き床板の如き蒲團終宵仙夢圓かならず。



八月五日午前五時半起床六時半出發。  
 前日に反して快晴然れども下界は全く雪の海を以て蔽はる。先づ元湯に至り泉源を見る元湯附近には黄金湯三國一の湯蒸湯目の湯等あり。浴槽多くは破壊す浴舎は元と此附近にありしも激甚なる噴出の爲めに埋没し多くの死者を出せしより明治二十八年の頃其の下方に今の浴舎を再建せしと聞く。昨木地より温泉までの道路は山路と雖も浴客等の往復多きを以て甚だしき困難を感ぜざりしも此日温泉より鑛山に到るの間は頗る悪絶を極む。進むこと敷町にして沮洳の地あり水苔多きところタテヤマリンダウを見る。本種は立山阿彌陀原に多きもの由て此名あり白馬の連峰にありては余は此地に始めて本種を見る。行く／＼喬木帯中に白花シヤクナゲサンクワウ等の満開せるを見る。温泉より一里にして一溪流に會す瀬戸川と呼ぶ。

水邊にシナノナデシコ多し此所にてノビチドリノ葉に美麗なる白斑あるものを採集す。瀬戸川より一町許の所に鑛山人夫の飯場あり暫時休憩す。時に午前八時此地には他日精練所を設くるの計畫ありと附近にてコマガタケスグリの盛んに實を着けたるを見る、キヌガサ、ウの一面に満開せる様の特に美事なりしかば撮影す。猶迂廻曲折せる喬木帯中の阪路を登る、一二の老松亭々として空を衝くあり燈籠松と呼ぶ樹下に踞して休憩すること暫時之れより路少しく下る一溪流の附近に出づ時に十時三十分俄然大残雪の小溪を埋むるを見る、下部融解して呀然一大空洞をなす。雪の隧道……雪の隧道。  
 昨温泉附近より鉢ヶ岳雪倉赤男白高地等の峰巒に白雪の皚々たるを仰ぎ見たれども未だ残雪に會せず此所に始めて此萬年の雪を見る。喬木帯漸く盡く我が崇敬する白馬嶽裏山に於ける灌木帯及草本帯の



奇將さに之より始まらんとす。多年看んことを希望せし白馬の後影に接する最早遠きにあらざるべし。之れより亂草の間を分けつゝ登る、オホイタドリの繁殖の盛なる此地の如きは、日本アルプス中他に多く其の比を見ず。附近一帯悉くオホイタドリの叢にして高さ皆三米突内外宛然一大竹林の如し。燈籠松より半里にして下巴と稱すところあり、蓮華鑛山にて開設せる新道は、既に此附近に達せり。此新道にして温泉まで開通せば、白馬裏山の登山も容易なるに至るべし。下巴より約三十町にして上巴あり。蓮華鑛山の飯場は、上巴の附近にあり。下巴、上巴兩地の中間に於て、高山植物の一面に満開せる所謂御花畑の觀あるところを發見す。余等は新に巴平の新名を下す。ミヅイテフの清楚大櫻草の濃艶、ナンキンゴザクラの満地に紫花を開ける蘭科の逸品ニヨホウチドリの如き手に従つて採ることを得べし。

ムントリスミンの如きも殆んど雜草の如しとは、少しく形容に過ぐ。誠に高山植物中の尤物、皆此地に集まれり。嗚呼、巴平未だ採集家の蹂躪に遇はず、今後と雖も道遠くして人の容易に到らざるところ、永く高山植物の寶庫たらん。人夫の案内にて雜草の間に斷礎を見る、これ上杉謙信が蓮華鑛山を採掘せし時設けたる門柱の跡なりと、其の信僞は定かならず。

午前十一時五十分蓮華鑛山第一飯場に達す。事務所及二棟の人夫小舎あり、何れも陋隘なる假小舎のみ、暫時此所に休憩す。蓮華鑛山は往昔上杉謙信の採掘せしめしもの、後世高田藩神原侯も採掘を試みられしが、永く廢坑となりしを近時又採掘を始めしもの、終歲萬年の雪を以て埋められたるところ、多量の産出あるにあらざれば、到底收支償はざるべし、坑は此飯場より凡そ半里程の所にありと云ふ。飯場の前面西南



一帯の大溪谷は、全く大残雪を以て埋めらる。斯の如き大残雪、日本アルプス連峰中未だ多く其の比を見ず、實に一大壯觀たり。此雪溪を隔て、聳ゆる峻嶒たる峻嶺は、左方は即ち蓮華、乘鞍、飯場、の正面直に帽を壓するものは、これ大日の雄峰なり。大日の右方なる一大溪谷は、即ち鑛坑の所在地。其の右方は、岳雪倉等の連嶂なれども、此地よりは峰頭を見ること能はず。

昨木地より温泉に到る間は、浴客の往復する一筋道なれば、迷ふことなく、今朝温泉より此鑛山に來るの間も、路明かにして左までの困難も感ぜざりしも、之れより白馬絶頂に到るの間は、殆んど道と稱すべきものなしと云へば、熟練なる案内者を要す。然るに吾が三名の案内者は、此地以上の地理を知らず、且つ四近の峰頭に屢々白雲の徂徠を見る……白雲の徂徠……嗟、巖たる峰頭に白雲の徂徠、何ぞ夫れ美的なる。然れ

ども我等登山家に取りては、之れ大禁物、身一度彼の白雲に蔽はるゝときは、地理に明かなる者と雖も、時に不測の災難に遭遇することあり。依て鑛山事務所に交渉し、山中の地理に明かなりと稱する鑛夫の一人を先達となす。午后一時此地を出發す、飯場より鑛坑に至るの間、凡半里屢々急峻なる残雪を横過す、途中高山植物の盛に開花せるを見る。鑛孔より半里許の上方に於て、残雪の左方一面にムシトリスミレの開花を見る、即ちカメラを据へて自然の状態を撮影す。ムシトリスミレは本邦中部以北の高山に産す、常に濕潤なる斜面に多し、葉は葉柄を缺如し、長楕圓形にして、葉面に絶えず粘液を分泌し、小虫を捕ふ、花は概形のみ、スミレに似たり、色濃紫色、曾て白色の者を得たるものありと聞けども、余は未だ斯くの如きものに接せず。草形本種に酷似し、白花にして、瓣は橙黄色の斑點一二を有するものは、歐洲に産する *Pinguicula alpi-*



目一と稱するものなり本邦に於て未だ其の産ありしを聞かず。此附近に於てタカネスミレの盛に繁殖せるを見る。タカネスミレは本邦産幾多の莖菜中最も高所に分布せるもの高山崇靈の地にあらざれば産せず。其の葉其の花實に云ふべからざるの清姿あり其の一輪を摘むときは何者か吾人が胸裏の琴線に觸るゝものあり。世の青年スミレを主題として愛を説き戀を歌ふしかも彼等はスミレの最高潔なる種類を知らず其の知れるところのものは朱を奪ふの紫花なるものか或は濃蕪人を酔はしむる洋種のスミレのみ。ひべなり其の愛の高潔ならざる其の戀の卑陋なる事や。タカネスミレの莖葉の多肉なるは乾燥し易き爛砂の間に成長するに適しキバナノコマノツメの如く纖弱なる態なし其の花の大形なること亦彼れに勝れり。上下茫茫幾千歳會て俗塵を被らざりし此珍種今や吾人の爲めにしば

しば紅塵萬丈の間瓦盎中に養はる彼れ若し物云はゞ何とか云はん。余は始め八ツ岳及鍵ヶ岳に於て之を探り頗る珍奇なる種類と思ひしも日本アルプスの各峰を踏破するに及び本種は日本アルプスの高處に普通なるものなるを知れり又本種はキバナノコマノツメの變種とせらるれども余は其の甚だ不當なるを認む。

下

蓮華鏡山より里余。

大残雪を發り盡せば白馬の山勢東北にひきて鉢ヶ岳雪倉等に續ける馬背の如き山稜に出づ。爰に始めて余は久戀の白馬嶽の後姿を見る實にや想像に違はず其の英姿の雄渾偉大なる西には朝日岳東には蓮華乗鞍東北鉢ヶ岳雪倉等溪間に峰に残せる幾多の残雪をりからの夕



陽に映じ光彩陸離として眼を眩す。  
 大嶽崇嶺皆首を俛れて敢て仰ぎ見るものなし何ぞ絶世英雄の資ある  
 帝王の姿に髣髴たる。人はバベルの塔をも完成すること能はずひた  
 すら自然の偉大を誦はんのみ。  
 猶ほ吾が立てる山稜より西方の脚下を見よ。灼礫たる一面の明鑑周  
 圍に萬古の白雪あり水は清碧深さ幾尋必ずやこの無底の淵これ山下  
 村民が神靈視せる池ノ平の湖常に白氣の濛々として湖心より立ち登  
 るを見る蓮華の山靈此湖底を居となす。若し人の脚を此池に入れ手  
 に其の水を掬ぶあらば山靈赫怒須臾にして全山鳴動天地晦冥迅雷暴  
 雨忽ち至り其の災害はかられざるものあり。屢々此湖邊にありて山  
 靈の怒に觸れ身命を失ひしもの妙からず。聞け人夫が湖上を指しつ  
 吾等に語れる一條の物語を。

會て山麓の獵夫十一名數匹の犬を率ゐ多くの糧食を携へ野猪熊狼羊  
 等を獵せんと數日間諸方を跋渉し遂に池の平に來る。一行中の壯者  
 は老獵夫等の止むるをも聞かて靈池の氷上を渡り附近に露宿す。池  
 水に觸るだに快とせざる山神いかて其の不禮を怒らざらん夜半より  
 風雪激しく數日を経るもやまず。獵師共は一步も小舎より出づる能  
 はず全く數丈の雪下に埋められ食つきては愛兒に等しき獵犬を屠り  
 僅に飢を凌ぎたれどもこれさへつきては如何ともすべからず。某老  
 獵夫の如きは餘命幾何もなき吾れは死するも惜しからず願はくは吾  
 れを殺して其の肉を啖ひ望み多き壯者をして餓死せしむべからずと  
 絶叫するに至りぬ。其の慘憺たる光景眼前にあるが如し。晝夜の別  
 なき雪下にありては既に幾日を経たるか定かならざれども風雪や  
 鎖まりたれば小舎を埋めたる三丈ばかりの雪を掻き分け雪上に匍ひ



出て見れば、風雪全く收まり午後三時頃と覺しければ、一同皆小舎を出て飢餓の爲めに足もとも定まらず、蹣跚として家路に向ふ。さて山麓の村民は獵夫の一行山に入りて既に八日杳として其の動靜を聞かず、其の間に嶽暴れありしかば皆心元なく、其の踪跡を尋ねて此附近に來り一行に邂逅し、爲めに皆無事下山することを得たり。一行若し此搜索隊に遇はざるときは、到底一人も倒死を免がる、能はざりしならん。次ぎは吾等の記憶に新らたなる、明治三十八年五月の悲惨なる出來事なり。山田某、中峰某、外二名の獵夫熊を追ふて此靈池の附近に來り、小舎を作りて露宿せしに、之れ亦恐るべき風雪に遭遇しければ、狩りを中止し、急ぎ下山せんと風雪のやゝ收まれるに乗じ、小舎を出てしに忽ち濃霧の爲めに包まれ、方向を失し、一名は其の夜十二時頃、鑛山の小舎に達し、一名は小舎の附近にて倒れ、此山に出入すること二十余年、蓮華

の連峰知らざる谷なく行かざる峰なしと稱せし山田某、四十余歳は露宿地の小舎より程遠からぬ、偃松の上にて非業の死を遂げ、中峰某、十七歳は靈池の邊雪上に斃れ、希望多き十七歳の青年遂に山靈の犠牲となりぬ。嗚呼、池ノ平の靈池。全く世人の近づくと許さず、此邊を過ぐるものは皆聲を潜め、首を縮め、歩を早うしてひたすら神威を冒瀆せざらんことを勉むるとかや。此慘話を耳にして、此靈池を望むに、凄愴の氣、人の魂魄を奪ふものあり。こゝより白馬の頂上目懸けて登る、天壇既に咫尺の間にありと雖も、雲梯攀ぢ易からず。高頭氏は雙眼鏡を取り、頂上に二三の人影を認めたりと雖も、定かならず。山骨壞崩せるところを上る、脚を觸るれば、脚下の數石動搖し、一步を誤らんか石と共に墜落すべし、其の危きこと云は



ん方なし、一行戦々兢々たり。白馬表山方面の登山路にありては斯の如き急険は十が一をも経験すべからず。岩罅の間に岩ツメクサ、コバノツメクサ、ミヤマミ、ナグサ、チングルマ、シコタンサウ等時を得顔に満開せるあり。一分の岩罅を生命とし、一撮土を握て生を托せる有様、余は一掬の涙を注げり其のいぢらしさに。絶頂に近づきて兩側絶壁をなすところ、劔の刃渡りか、蟻の戸渡りとも呼ばん所一行大に遅る。余危きを犯し、踊躍頂上に直進す數百貫目もあらんと思はる、一岩石に左足を觸る、や驚くべし、憂然として動き出だせり何かは以てたまるべき、忽ち足を失して此巨岩に跨る、岩は余を載せたるまゝ、半ば回轉せしかば、余は岩上より振り墜されて七八尺もあらんと思はる、岩下に真逆様に墜落せり。肩に掛けたる草蓑の爲めに頤部を岩石に打ち付けざりしを以て生命に異状なかりしも右

足の脛部は脚腫を破り、肉を裂くこと五ヶ處、右脛にも負傷せり。精神確かなりしも動く能はず、一行の近づけるに驚き、僅に匍匐して絶頂に登るを得たり。時に午後五時半、濛氣四近をこめて四圍の眺望を妨ぐ、急ぎ石室に達し、宿泊の準備をなす。常に高山に登るに下界にありては快晴なる天氣も、山頂に至れば天候不良に陥入ること多し。然るに本年各所の高山に登りしに、山頂は常に快晴多く、下界に下れば曇天降雨等多し。上れば晴れ下れば降るか、くして余は日本アルプス三大横断を遂行せり。此山頂の如きも降雨少なかりし爲めならん、例の湧泉涸渴して清水を得るに頗る困難を極めたり。一行今後の行程は、鑓ヶ岳の裏面を経て温泉に到り、一夜の露宿をなし、南股を下りて細野に達し、四ツ屋に到る豫定なり。故に越後の人夫は



此所より歸村せしめ細野の人夫をして今夜或は翌早朝登山する様出發前に通知し置きたり。去れば余等はしきりに細野人夫の登山を待ちたれども此夜は遂に來らず。

五日午前四時山頂の日出を大觀せんものと皆絶頂に登る。下界は全く白雲の怒濤狂瀾此雲海に日出の光景幾度筆を執るも其の萬一をも書くこと能はず。此日若し細野人夫の登山するものなくば直に下山せんものと評議一決し石室に歸りて六時朝食を了る。

午前中細野人夫を待つこととして一名の人夫を率ひ他を小舎に残して鎧ヶ岳附近に到る。彼のクモマキンバウゲ等は積雪の下にありて一も得ること能はざりき。杓子ヶ岳の裏面附近の山稜に立ちて葱平附近の残雪を隔て、白馬の絶頂を眺めし其の雄大壯嚴なる光景には、一行三歎せざるなし。卷頭雪を隔て、白馬の絶頂を望める印書は此

際此時この地に於て撮影せしもの。

看よや森嚴なる大山の山姿。

想像せよ雄渾偉大の眺め。

正午石室に歸る。細野の人夫遂に來らず即ち一行を促して下山の途に就く。氷河の遺趾葱平の御花畑大雪溪一行の人々をして驚かせしこと幾度ぞ。午後三時半近時開かれたる白馬尻の白馬鑛山の假小舎に達す。小屋は昨年發見せられし大石室の附近にあり大小數棟目下探鑛中なりしを以て人夫も多からざりき。此銅山の爲めに白馬尻以下道路大に開け將さに馬を通せんとなす。故に他日此山に登る者は假令風雨に遭遇することあるも第二回登山の際の如き困難はたゞ昔日の夢と化せり。然れども一利一害は數の免がるゝ能はざるところ之れより登山の客益々多く高山植物は濫獲せられ靈山遂に俗了せずん



ば幸なり。  
 中山澤に至りしとき既に五時半二股にて日全く暮る。空腹と疲勞とにて、只さへ困難なるに、暗夜咫尺を辨せず、一行一步も進む能はず。余即ち獨り先づ馳せて細野に至り、民家に就きて燭を借る。途に登山を依頼せし人夫丸山某に遇ふ。余は何故に登らざりしかを詰問せしに此山祭りに相當せしを以て翌早朝登山すべき豫定なりし由を答ふ。燭を取りて一行の爲めに先導し、四ツ屋に達せしは實に午後十一時半なりき。六日午前六時出發、大町に向ふ。

白馬嶽登路案内

一、白馬岳表口

一、東京飯田町停車場より信州明科驛まで百三十四哩、汽車賃壹圓九拾

壹錢。  
 二、明科驛には旅舎明科館あり。  
 三、明科驛より北安曇郡大町まで約六里。馬車にて約四時間、賃錢四十錢。人力にて約二時間、半賃錢八十錢。  
 四、大町には旅舎對山館あり。  
 五、大町より同郡北城村四ツ屋まで約六里半。馬車にて約五時間、賃錢五十錢。人力車にて約三時間、半賃錢一圓。  
 途中に青木中綱、木崎の三湖あり。  
 六、四ツ屋には旅舎山木あり。  
 七、白馬登山者は旅舎山木、松澤貞逸方を根據とじて諸般の準備を爲す



べし。人夫は旅舎に命じて確實なる者を雇入すべし、一日の賃錢五

十錢。八、四ツ屋より細野を経て白馬尻まで約三里。主として喬木帶中を通

過す、途中に白馬銅山にて作りし小舎あり、路は銅山にて三十九年中

に馬を通ずるまでに修築せし筈。

九、白馬尻には白馬銅山の小舎あり。

十、白馬尻より葱平まで約三十町、大部分雪上を上る約二時間を費すべ

し。

十一、葱平には銅山にて建てたる小舎あり。

十二、葱平より頂上石室まで約十町、途中にて氷河の遺跡を見るべし。

十三、石室は十人位を宿泊せしむることを得べし。水は西方一二町の

所より湧出す、薪は小舎附近の偃松は大方切り拂はれたることを忘

るべからず。

十四、石室より頂上まで約七町。

二、鍵ヶ岳方面

十五、白馬頂上より杓子岳の裏面を経て鍵ヶ岳の頂上まで約一里半、殆

んど路と稱すべき程の者なきを以て必ず案内者を要す。

十六、鍵ヶ岳絶頂より鍵ヶ岳温泉まで約一里弱、案内者を要す。

十七、白馬頂上より鍵ヶ岳裏面を廻はり、温泉に達することを得。道は

前者より容易なれども、時間に於ては大なる差なし。

十八、温泉に入浴することを得べし、無人の靈泉なり。露宿せんとせば

小舎を作らざるべからず。

十九、温泉より入ノ二股まで約一里、悪路なり、案内者を要す。

二十、入ノ二股は露宿地に適當なれども、小舎等の設備はなし。



廿一、入ノ二股より四ツ屋まで約二里半溪流に沿ふて下る。

三、白馬嶽裏山口

廿二、越後國西頸城郡糸魚川町より同郡根知村根小屋まで三里弱馬車を通ず。

廿三、根小屋には山本屋あり。

廿四、根小屋より山ノ坊まで三里。此所にて準備をなし案内人を雇ふべし、一日五十錢以下。

廿五、山ノ坊より大所を経て木地まで約一里。

廿六、木地より蓮華温泉まで約三里弱五時間を費すべし。路は喬木帯中を通じ難所なし全く無人の境。

廿七、温泉には米味噌等の必要品あり。

廿八、温泉より蓮華嶺山の瀬戸川飯場まで約一里。

廿九、瀬戸川飯場より蓮華嶺山第一飯場まで約二里道路は嶺山にて修築中。

三十、第一飯場より坑口まで半里屢々残雪を渡る。

三十一、坑口より雪上を行きて池の平まで約一里案内者を要す。

三十二、池の平附近より白馬頂上まで約一里路と稱すべきものなし。

三十三、蓮華嶺山以上には露宿すべきところなし。

三、第二回横断 (針木峠及越中立山)

烏嶺

一、針木峠

上

針木峠……針木峠……峠と聞かば人は箱根峠碓氷峠を聯想すべし。

箱根峠は天下の險路……碓氷峠は蜀の棧道も嘗ならず。



我れ曾て富士にて風雨に遭ひ其の頂を極むる能はず中途より下山し、  
 轉じて三島に入り午後四時箱根峠を登り暗夜獨り之れを越ゆ。險と  
 雖ども天下の大道。蜀の棧道雷ならざる碓氷峠瀛車我が夢を載せて  
 越ゆるにあらずや。  
 針木峠は如何なる峠ぞ。チャンバレン氏の日本アルプス横断記に曰  
 はく、「針木峠は惡絶險絶天下無比」と。針木峠は海拔八千三百尺箱根  
 峠二千八百二十二尺の三倍弱碓氷峠三千八十八尺の二倍半彼の關東  
 の平野に聳立せる筑波山二千八百九十二尺の高さに比すれば其の高  
 さこと三倍に足らざる僅に五百尺のみ。  
 明治八年信州北安曇郡平村字野口なる飯島某針木峠の新道を開き主  
 として牛を使役し越中より食鹽を信州に輸せり。然れども數年にし  
 て交通全く絶え爾來三十年多くは崩雪の爲めに路悉く破壊し今は殆

んど路と稱すべきものなし。且つ信州より越中に達する四日程の間  
 立山温泉を除くの外は全く無人の境終始溪流を遡り或は溪流に沿ふ  
 て下るものなれば途中一度豪雨に遇はゞ一步も進む能はず又退くべ  
 からず進退維谷なり如何ともすべからず十分なる糧食なくば頗る困  
 難を極むべし。丸石小舎川田小舎等は只名のみにて丸石小舎は籠川  
 の水邊に一大轉石あるのみ川田小舎は殆んど破壊せる小舎の趾を見  
 るのみ。獨り黒部小舎に至りては嘉魚捕りの宿泊所雨露を凌ぐに十  
 分なり。針木峠の信州に向へる斜面に残れる大残雪の如きは之を登  
 るに殆んど三時間を費す其の斜面の急峻に至りては白馬大雪溪等の  
 遠く及ばざるところ壯絶を極む。幼時母の懷にありてお伽話に飛驒  
 にありと聞きし籠渡し今目前に之れを見るのみならず自ら此危険を  
 犯さざれば蕩々たる黒部川の激流を渡る能はず身を一線に托して籠



中より伏して谷底に奔湍激流を駈るとき神戦き目眩めき、竦然として肌(は)の寒さを覺ゆ。谷に殘雪の白さを眺め、峯に老鶯の嬌音を聞き、高山植物の奇葩紅白の粧綴せるを踏みて、佐々成政が越えてふ佐良佐良越を越ゆるとき、一種の感慨胸に迫るを覺ゆ。若し夫れ立山温泉を経て立山頂上に登らば、眼前に擴げられたる日本アルプスの一大パノラマ、實に之れ天下の壯觀、宇内の偉觀。

嗚呼、針木峠路險なりと雖も、黒部の川流急なりと雖も、必ず一度は越えざるべからず、渡らざるべからず。日本アルプスの連嶂を窓前に眺めたる信州大町對山館の樓上高頭、大平二氏と三人鼎座して針木越えの大評定下婢が野口入の山隈に白雲の搖曳たるを指して、針木峠は白雲の彼方と告げしとき、神先づ躍る。

既に白馬の裏山越えを決行し、意氣衝天、針木峠如何に險なりと雖も、邦

人の屢々之れを越えたるものあるのみならず、サトウ氏、チャンパレン氏、アトキンソン氏、ウエストン氏等之を越え、故フランシス氏の如きも此峠の絶頂に達せし先蹤あり。日本アルプス横斷記如何に惡絶險絶を絶叫すとも、既に此等の人々の成効せし通路、我に於て何かあらん。

里人は大町より立山温泉まで十五里と稱す、而してチャンパレン氏等は途中二泊三日を費せり、十五里……十五里、坦道ならんには日に二十里を行く易々たるのみ、十五里の短距離如何に險惡を極むるも、三日を費すは愚と云ふべし、余等は必ず二日にて達せん。第一日は峠を越えて川田の小舎まで、第二日は黒部を渡りて温泉まで、案内者及人足は吉澤田中、細川の三名、食糧四日分、携帶品は二個の大鍋を加へて、總量二十貫目。

八月八日午前五時出發の豫定なりしも、數日の疲勞の爲め一同起き出



てしは六時半なりき。人夫も亦後れて其の來りしは七時なり、七時半  
食事を了り、八時出發。豫定に後ること實に三時間、針木越え、未だ出  
發せざるに既に豫定に齟齬せり。

對山館を出て、高見町六日町を経て大原にかゝる野口に出づるは本  
道なれども、道稍々遠きを以て殆んど道もなき間道を進めり。右手に

平村二ツ屋の大澤寺の森を見る。大澤寺は古寺、領千石の巨刹、「信濃  
にあまる大澤寺、越後にあまる豆腐玄伯」の俚語あり。

九時鹿島川を徒渉す、地圖を案ずるに此川は鹿島鎗ヶ岳、餓鬼岳、祖父ヶ  
岳、鹿島大嶽等の谷々より發源する深水を集め、我等の徒渉せし僅か南

方にて高瀬川に合するものなり、水深からざれども、積廣く、一度降雨あ  
らば暴雨を逞うするを見る。

犬窪源行等を経て、漸々山路に入り、足趾少しく仰ぐ、一小峠を越ゆれば

即ち籠川の谷なり。谷幅廣く一面平坦なる草原をなし、籠川其の左方  
を流る。一條の細徑、原の中央を貫けり。之れより籠川の水源を極め

峠を越え、黒部を渡り、立山温泉に至るの間、全く無人の境思へば愉快、但  
し口には言はねど、一行の胸底には一團不安の念あり。平坦なる草原

歩むに何の困難もなし、亂草漸く深く、溪谷益々狭し、川は次第に水音高  
く、大町より既に二里半、十時四十分路の側に山ノ神の小祠あり、オホ

ナラの巨幹、枝葉繁茂して、天日を蔽ひ、いと神寂びたり、暫時休憩す。岫  
に無心の白雲を吞吐せる四周の山、既に尋常の山にあらず。飛騰横瀉

雪を吐き霧を散ずる籠川の水、既に普通の水にあらず。此山の奥、此水  
の源、針木越え容易ならずと思はれければ、かなはぬ時の神頼み、一行恭

しく此小祠に禮拜せしむるかきしき。斯くて猶ほ川に沿ふて上ること  
約一里、右方に破れし柳小舎を見る、人の氣配もあらず、十一時三十七分

約一里、右方に破れし柳小舎を見る、人の氣配もあらず、十一時三十七分



三ノ  
ま

始めて龍川を渡る。下れば降り上れば晴る、今回の日本アルプス横断旅行、今日も其の例に漏れず、朝来陰鬱、今にも雨かと思はれしも雲次第に薄れて、断雲の間より時々日光を見る。

清流龍川の水始めて仰ぐ蒼碧の空、一同快哉を呼ぶ。清流の礫石に踏して午餐を喫す。此所海拔約四千四百米。正午出發して進むこと僅かに二三町驚くべし、今迄判然たりし山道全く消えて跡もなし。之を人夫に質せば、此所までは小林區署にて開きし林道之より先は全く道なし、只此谷を何處までも此川に沿ふて上るのみと。いと事もなげには云へども、早や一步も進む能はず、人夫を先立て、進むオホイタドリの墜道。

一面に谷を埋めたるオホイタドリの密叢、高さ一丈以上もあるべし、さながら竹林の如く、其の間にオホレイジンサウ、ヨモギ、ミンガハサウ、翁

の如きヤグルマサウ、二三間もあらんと思はる、ノダケ、シ、ウド、白花を着けたるナツユキサウ、サンカエウの果實は既に黒し、手足面部の嫌なく服をも透して攻撃するヤマアザミの鋭針に刺されて前後に起る不時の叫聲、叢の内全く風なければ炎熱特に甚だしく、葉末の露に衣袂悉く濡ふ、其の不快言語に絶す。

左右に草を分けて、一步步に進む、氣は焦れども足進まず。處は龍川の大イミ、時は午後一時、先に進める人夫の一人、唯事ならぬ叫び聲、何事ならんと走せ寄りて指す方を凝視すれば、擬ふ方なき態兒の嬉戯せるなり。一行之を圍み河の濤りに逐ひ詰むれば、捕えんことも容易なるべけれど、若し母熊の附近に居らば身に寸鐵を帯びざる一行よも無難には終らざるべし、君子は危きに近寄らず、虎穴に入りて虎子を捕ふる必要もなければ、其の儘にて打ち過ぎぬ。午後二時、左方は半



峰以上雲に蔽はれたる一大障壁絶崖高さ幾百尺危岩我が頭上を壓し、  
 上には幾十年をも経たらんと思はるゝ針葉樹を點綴し青苔滑らか  
 にして龍髭虬髯容易に人の登るを許さず。右は籠川の奔湍或は岩に  
 激して波白雪の流るゝが如し、水は滑らかにして油の如く石は潤ふて  
 玉にも似たり、深瀬急瀨渡るべからず、止むを得ず四五間程下流に下  
 りしとろにて河幅廣く水淺きところを見出し我等は石より石に轉石  
 を傳へて漸く渡り、人夫は重荷を負ひしまゝ水中を徒渉す、水腰に達す  
 之れより流れの右に沿ふて進む。もとより全く人跡なければ、只水邊  
 の歩み易きところを撰びて進む、シラカンバナ等の潤葉樹多く、頽嵐  
 峭緑人の衣袂を青殺す。見上ぐる許の樹梢に古き草鞋などの懸か  
 れるを見る。人夫の談に此邊冬季雪の積ること三四丈、今空に霽ゆる  
 此等の巨木樹梢僅かに數尺雪上に現はるゝのみ、冬季熊捕り等が小叢

の如き此樹梢に捨てたる草鞋雪なき今日斯くの如き高處にかゝれる  
 なりと。午後三時河邊の砂上に大なる足跡を見る、何人か既に此地に  
 至りしよと注視すれば、人跡にはあらで巨熊の足跡深山にて猛獸の足  
 跡を見る、心地よきものにあらず。三時二十五分一溪右より來る、之れ  
 扇澤なり。海拔約千三百米突屋の如き巨岩大石磊々として谷を埋む、  
 豪雨の爲めに溪流怒漲し、此巨岩木の葉の如く流るゝとき、其の慘憺な  
 る光景果して如何。扇澤を徒渉す、水深く瀬早し、猶ほ籠川の本流に沿  
 ふて進むこと一二丁、右方の絶壁にて行く手全く塞がるところ、二本の  
 大木流水の兩側より水上に架せられたるあり。水多き溪流を渡らん  
 とするときは二本の樹木を互違ひに水上に架して渡るを常とす、され  
 ば余は一見して此倒れたる樹上を渡りて對岸に移るべきを悟れり。  
 然るに三人の人夫は之れ人の架したるものにあらず、雪解の水の爲め



に流下せし樹木の偶々此所に來りて懸かれるなり右岸の絶壁下猶ほ  
 通過すべき道ありと主張す。余は其の見の決して誤らざるを説けど  
 も彼等肯ぜず。孫子に曰はく將能あり君之れを禦せざれば勝つと一  
 旦案内者として依頼せし以上は彼等の行く處に従ふべし人夫の後に  
 従ふて進むこと僅々一二町俄然絶壁と流水との間に寸尺の餘地なし  
 止むを得ずツガ、ヒノキ等の密生せる絶崖を登る針葉樹巨木の下シロ  
 パナシヤクナゲの繁殖せることさながら鹿砦の如し。此間をくゞり  
 て進むこと二町ばかり之より直に積に降らんとす高さ四五間一面の  
 絶壁扉障の如く其の面平滑手足を懸くべき凹凸なく下は石礫磊々た  
 る水邊下るに由なし。日頃携へたる麻繩數本を木の根に結び之れに  
 依りて漸く降るを得たり。針木越えの悪絶險絶之れを以て序幕とす  
 べし。之れが爲めに時間を空費せしこと多く時は既に午後四時二十

分前の樹木は全く何人かゞ架せし獨木橋なりしなり人夫は自己の不  
 明を陳謝し余は彼等の技倆を疑へり。  
 此日峠を越えて川田に達すべき豫定なりしも意外の失策多く時既に  
 四時を過ぎたれば露宿の準備をなさざるべからず。然るにチャンバ  
 レン氏等が露宿せし丸石の小舎に至るにも未だ多少の距離を有する  
 を以て到底豫定の行動をなすこと能はず適當の地點を撰びて小舎掛  
 けを爲さざるべからず丸石澤左より來りて合する處丸石の小舎あり。  
 海拔約千四百米突小舎と稱するも何等の設備あるにあらず高さ一間  
 半長さ三四間もあらんと思はるゝ大石水邊に轉落せるものあるのみ。  
 而して若し降雨あらば此四近は直に浸水すべき地勢なり曾て參謀本  
 部測量員は此所に露宿し諸般の器具を此所に殘し峰に登りて測量に  
 従事せる間に出水ありて悉く之れを流失せしと聞けば露宿地として



は甚だ不都合なり。由て此地を顧みず進むこと三十分午後五時半岩  
小舎澤(海拔約千四百五十米突)の合流點に達す。澤より押し流せる砂  
礫堤防の如くなれる所稍々平坦なり即ち此所を露宿地と決す。支柱  
を建てテントを張り小舎全く成れるとき日將さに暮れなんとす。大  
平氏は清冽玉の如き溪水に入り冷水浴を試み快と稱す萬事不便なる  
内にも薪のみは無盡藏積んで山の如し終夜之れを焚きて夜寒を防げ  
り。

中

八月九日未明テントを徹して程に上る。溪流に沿ふて上ること前日  
の如し此附近はオホナラ、ミチバリ、ヤナギ、サハグルミ、チヅ等の喬木多  
し進むこと數町夜は全く明け離れたれども朝霧谷をこめて小暗きに

突如として前面の叢中より現出せる六尺ゆたかの大男其の面貌の猥  
悪なる人をして竦然たらしむ若し單身此所に彼れを見れば劔を案じて  
身構へすべき代物なり。人夫中彼れを知れるものあり彼れは其の後  
方より來れる他の一人と共に黒部の小舎の主人なり一人は大町他は  
安曇村の者十數日以前より黒部の小舎に滞在して嘉魚を捕り今や多  
くの獲物を負ひて歸宅するものなり。昨夜峠の附近に宿り今朝未明  
月光に道を求めて爰に來れるものなり。人は見掛けによらざるもの  
吾等の爲めに前途を教ゆること懇切丁寧を極む。今此地を出立せば  
急ぐにあらざれば今日中に黒部に達する能はず小舎には鍋の如き必  
要品を残し置きたれば携帶するの要なしとの事故人夫は二個の大鍋  
を此地に置き幾分にも其の負荷を輕からしめ必ず黒部に達せんこ  
とを期せり。猶ほ二人の嘉魚捕りは黒部川に於て負傷せる大熊の流



れ來れるを拾ひし由語れり之れを聞きて余は左の想像を胸裏に畫けり。

黒部の川の谷深く峯には残る千古の雪谷を鎖さず堅氷幾尺雪の傍ら氷のほとり、さすがは夏、江果累累たるイチゴの幾種、谷蔭より現はれ來りし巨熊、イチゴの甘汁に喉を鳴らせるをりしも、峰より來れる一個の巨熊互に夫れと知りては、猛獸の常習牙を鳴らし瓜を磨き、勇戦奮闘幾時間、氷は血潮に染みて時ならぬ花紅葉、一は氷上に脚を失して墜落す、黒部の深潭、一は雪上に斑々たる櫻花の落英を印して窟に歸る、修羅の衝の活劇止んては、血に染まれる黄花のスミレ二三再び太古の寂寞に復る、兩虎相争ふときは共に至き能はず、黒部川に溺死せるものは、嘉魚捕りの爲めに得らる、鵝蚌の争實にや、漁夫の利となる。

はなかなき空想より我に歸り、嘉魚捕りに別れを告げ、内小舎澤を過ぎ、

赤澤の合點に來る。時に午前七時五分、此附近既に高山植物を見る、シナノナデシコ、タカネヨモギ、イハワウギ、キバナノカハラマツバ、ナツユキサウ、ウラジロタデ、ミノガハサウ、ノウゴウイチゴ、ミヤマクワガタ、アラシグサ、キバナノコマノツメ等盛に花を着けたり。

午前八時十五分、溪流全く盡きて、始めて皚々たる白雪の谷を埋むるを見る。海拔約千七百米、突、暫時休憩す。之れより全く雪上を登る、其の斜面の急峻なるは多く、其の比を見ず、山水を得ざれば、生動せず、水山を得て始めて始めて見るべし。日本アルプスの偉觀は、所謂萬年の雪を得て益々偉なり。一度雪上に來れば、雲霧徂徠し、附近は異卉珍草、續紛たり、此靈域全く人圈にあらず。雪上を登ること凡そ一時間、半雪上に物あり、益爾として動けり、あはれや蜻蛉の凍えて飛ぶ能はざるなり、窮鳥懷に入れば、獵師も殺さず、一片惻隱の情に堪えず、乃ち捕へて我が温かさ懷



に收む。海拔約二千メートル將さに死せんとせし蜻蛉體温によりて  
 回生しきりに飛び去らんとす乃ち之を空中に放てば、翩々として高く  
 揚がれり。行け……行け……行きて山靈に告げよ吾等の一行今靈域  
 を犯すと。午前十時二十分雪溪二支となる。右方は猶ほ氷雪遠く谷  
 を埋むるを見る吾等は左方の谷に沿ふて登る。此附近より氷雪破壊  
 せること多きを以て谷側を登る傾斜愈々甚だしく雪殆んど盡きたる  
 ところ海拔約二千八百八十米突。然れども巨岩の蔭低凹の地氷雪多し、  
 チングルマ、アオノツガクラ、キングルマ、ミヤマキンバツゲ等の植物  
 滿地に開花せるを見る。右方の絶壁一面に壊崩せるところ所々に舊  
 道の跡を見る。今日の登山路は、昔日の路と全く異れるところなり。  
 雪つきてより以上は岩石の壊崩甚だしく、一步毎に益々危険を加ふ。  
 故フランシス氏が岩石壊崩の爲め生死の間に出入せしとは必ず此附



山頂の岩の崩れ



近の事ならん何人と雖も此附近に於て風雨に遇はゞ其の死生實に測  
 られざるものあらん。斯の如き危険を犯して登ること三四丁十一時  
 二十五分遂に針木峠の絶頂に達す海抜約八千二百尺。附近に白雪多  
 し、チンマキ、ヤウの盛に開花せるを見る。時に霧深くして四方の眺  
 望を全く妨げられて、展望を恣にするに能はざりしは千古の遺憾な  
 り。少しく平坦なるところにて休憩す傍らに木標の倒れたるを見る、  
 長さ二間、八寸角材は半ば朽ちて定かならず、櫛風沐雨こゝに幾年材質  
 白く朽ちて文字を見る能はずと雖も、之れ信濃越中兩國の分界標。知  
 るべし我が左足は信濃を踏み、右足既に越中に入れるを。人夫を督し  
 て此木標を再建せしむ、今や信山を後にして越水に親まんとす、希くは  
 信州の千山萬岳幸くあれ。  
 之れより又急峻なる斜面を下降して、黒部川に出でんとして川田の谷



に向ふ。時の附近盛に驚聲を聞く、人囀は既に三伏の候なるに、此靈境  
 今春なり。針木峠は越中に下る方面は信州より上りし方面に比すれ  
 ば實に容易にして又全く残雪を見ず、雑草の間細徑明かに通るべし、只  
 所々に地這りせしところあり、峰より谷底目懸けて真直に走れる急峻  
 なる斜面屢々之を横過せざるべからず、其の中途に於て足を失せんか、  
 直下幾百尺恰も九天より奈落に墜つるの概あらん。他に又一行の恐  
 怖せし事實あり、即ち到處熊が草根を掘りたる跡あり、路の左右殆んど  
 一面銳爪の痕歴然たり、しかも其の土未だ乾かず、或は未だ附近に徘徊  
 せるにあらざるかを疑はしめしものさへありき。  
 午後一時、谷に下り、又溪流に沿ふて行く。細徑再び絶ゆ實に針木峠の  
 通路は崩雪の爲めに年々破壊するを以て、今年の路は昨年の路にあら  
 ざるなり。一度降雨あらば、溪流土砂を流し、河床を變ず、故に今日の道

は昨日の道にあらざるなり。淵瀬常なきは飛鳥川變化極りなき針木  
 峠吾人は確實なる案内記を記述すること能はず。此記を讀みて再び  
 此時を越ゆるの人、此一言を忘るゝ勿れ。而して吾が案内人は此變化  
 極まりなき險惡の路を三年以前に越えたるなれば、殆んど不知案内な  
 る難路に踏み入りたるが如く、全く案内者たるの用をなさず。路窮す  
 れば吾等に向つて曰く、客何所をかく行くべきかと、彼等に問ふべきとこ  
 ろを以て吾等に問ふこと屢々なり。前日既に扇澤に於て彼等の伎倆  
 を觀破したる余は、彼等に向つて多きを求めず、獨り先頭に立ちて終始  
 路を求めて進む。溪流始めは水少なりしも、漸々谷深く水多く自由  
 に水中を下ること能はざるに至れり。午後三時、川田の小舎に達す、會  
 て露宿せる跡を認むべしと雖も、殆んど雨露を凌ぐこと能はず、前夜宿  
 すべき豫定なりし此地に、今日午後三時漸く達するを得たり、意外に時



を費せしを見るべし。川田の小舎は海拔約千八百米突午後三時五十分右方に一大峭壁を見る其の面垂直塀障を立てたるが如し。余は未だ斯の如く奇抜なる大絶壁を仰ぎしことなし確に川田の谷に於ける一大奇觀と云ふべし。午後四時二十五分斷雲の間に立山連峰と覺しきを認む時既に四時を過ぐ未だ容易に黒部川に達する能はず黒部を渡らざれば露宿すべきの地なし又之れありとするも今朝嘉魚捕りの談によりて鍋を携帶せざれば米ありと雖も食を得ること能はず且つ天候も晴雨の程測るべからず若し不幸にして降雨あらば絶命の域に陥らざるべからず依て三人相約し後れ勝ちなる人夫の來るを待たず全速力を以て黒部の小舎に達せんことを期せり。

午後五時二十分草莽の間に小舎の焼けたるものありしを見る同五時三十分溪流水深くして徒渉すること能はず一大喬木の倒れて獨木橋

の如くなれるを見出し之れ天佑と危きを忘れて對岸に渡る。全六時半漸く黒部川の岸に出づ針木峠の頂より此黒部川の岸に到るに余等は約七時間を費したれども若し熟練せる案内者ならんには必ず約五時間にて容易に達すべしと信ず。此行案内者の殆んど用をなさざりしこと前述の如し。故に余等は一草の倒れたるにも眼を注ぎ一葉の落ちたるにも心を留め注意して嘉魚捕り等の通過せし跡を尋ねて前進せり重荷の爲めに後れ勝ちなりし人夫は却て屢々路を失し爲めに余等が無益の時を費せしこと少々にあらず今や目的地に近づきて一行并舞雀躍。

看よ山間の一溪流と思ひし黒部の川を水肥えたれどもしかも岩石現はれ岸に激しては雪花を噴き岩に腹かかれては浮膏碧を凝らす岸高く谷深く其の恐ろしさに意外の感に打たれしとき寒き川風身に沁みて



思はず烈しき戦慄を覺えぬ。  
 如何にして此激流を渡らんかと附近を見るに、爰には嘉魚捕りが朝な夕な通ふらん、飛彈にありてふ籠渡しあり。彼方の岸の高きため、此方に設けられたる櫓の上より一線縷の如く川を越え、之れに一個の籠懸かれり、其の前後には之れを手繰るべき通ひ綱あり、打ち見るからに恐ろしげなれども、早や六時をも過ぎたれば、猶豫すべきにあらず、運を天に任せ、猿の如く櫓に上り、籠引き寄せて之れに乗れば、身は一線を命として虚空に懸かり、前後左右に動搖して其の危きこと、風前の燈もあろかなり。

前方の通ひ綱を手繰れば、籠は一寸二寸と此方の岸を離る、數十間の綱なれば、身の重量にて籠の懸かれるところ、下垂したれば、中程までは左程の困難を感ぜざりしも、之れより先きは力に任せて綱を引けども、身

の重きこと千貫、其の進み誠に遅々たり、手も心も疲れ果て、暫時やすらひ谷底を下瞰すれば、下には激流奔湍の恐ろしき、慄然として眼眩めき、身毛悉く堅つ、飄々乎として虚により、風に御すてふ形容詞はあかしきこと、思ひしも、今眼のあたり虚により、風に御し、身を一線に托せる危きは、其の險言語に絶す。漸くにして籠は彼岸に達したれば、直に岸に躍り上りぬ。次に大平氏は直に通ひ綱を引きて、籠を戻し、之れに乗り漸く中程に達したれども、同じく進むこと遅々たり、全身の力をこめて一引きひけば、通ひ綱は強弓の弦の如く緊張し、ブル／＼と波動するかと見し刹那。

驚くべし、命の綱はフツリ切れて、此方に残る二三間。余は罔然として、獨り此岸に立ち、策の出づべきを知らず、激流の音に妨げられて呼べども聞えず、暮色蒼然として、四近小暗く、手眞似も見えず、兎角する内人夫



も来りしと見え、數個の笠影對岸の彼方此方と馳せ違ひ、狼狽の有様なりき。大平氏は中途より後方の通ひ綱を手繰りて引き返せり斯くてかすかに見えし笠影も今は全く暗中に没しぬ。

身には一の防寒具なく、一粒の食なく、行く手は何處ぞ路さへ知れず、我れ獨り、黒部川の對岸に立ち策の施すべきなし。若し日中の出來事なりしならんには、又施すべもあるべきに、此暗中如何ともすべからず。峰に氷雪ある此深山寒氣は骨に沁し、時以來何物をも口にせざれば、空腹堪え難たし、此際此時飢寒の如きは物ともせざれど、一度前途を案じては、身もよもあらず。斯くてあるべきにあらねば附近にありてふ無人の小舎を尋ねて、一夜を明かさんものと路らしきところを辿りて進むこと數間なるに、一天にはかにかき曇りて、黑白も知れぬ眞の闇、こは訝かしと四邊を探れば、實にく身は丈けにもあまる熊笹の墜道に入

りしなり。笹の密生せる爲め他に迷ふことなければ、手探りにて進むこと五六十間、熊笹絶えて眼前に現はれし二個の茅舎、これなん地獄て佛盲龜の浮木直に内に入りぬ。小舎の内は九尺に二間位の廣さ、手探りにて中央に爐あり、南方に窓あるを知りぬ、隙を得て蜀を望むは人情の常世態の習はし、此小舎の内焚火だにあらば食物なくとも防寒具なくとも、一睡の夢を結ぶを得ん、マツチはなきか火打ち道具のあれかしと煤と塵にて汚れたる小舎中を天井と云はず床と云はず、隈なく探りぬ、茶碗あり土瓶あり、鍋は大なるものしかも二個後に残りし一行は、今此鍋をしきりに渴望し居るならん、山小舎には必要なる升もあり、米櫃には一粒も残らず、用なきものは數多見出したれども、マツチは遂に見當らず、百方策盡きて獨り暗中に靜座し、一夜を明かすに決す。暗中に默座せしこと凡三四十分、小舎の上方にてしきりに人の呼ぶ聲聞ゆ。



此無人境此暗夜人の來べき處にあらず時にもあらず訝しけれども小舎より應といらへば彼れは人夫の一人一行今上流を渡りて既に露宿の用意を始めたれば速に來るべしとのことなり。余は夢かとはかり打ち喜び此所に嘉魚捕りの小舎あり稍完全なれば皆此方に來るべしと告ぐれば人夫は之れを諾し其の聲暗中に消えぬ。待つこと多時一向人の來べき氣配だになし如何しけんと案じ煩ふ果ては小舎を出て呼べども對へずあまりの訝しさに種々の疑惑を生じ先に暗中に呼びしは狐狸の業にやあらん木精石魅の戯れに余を驚かすにはあらざるか。斯くて一時間程を経て一行悉く到る。通ひ網切れて余獨り對岸にあれば一行の人々は種々評議の末上流の流緩なるところをば危険を犯して暗中徒涉し荷を解きて直に露宿の用意を始め一方人夫をして余に其の旨を告げしめしなりと。黒部川の水深胸に達し爲めに

下

一行の衣袂悉く濡ふ。此徒涉場水少なきときは腰に達する程なりと云ふ、皆小舎に入りて火を焚き衣を乾かし十一時一同寐に就けり。

八月十日此日余獨り先發して湯川の谷に路を失し困難を極めし一條の物語あり。

吾等は首尾よく黒部川を渡りたれども思へば遺憾。二日にて越えんとせし針木越え途中二泊の止むなきに至り甚だしく豫定と齟齬せしかば心中頗る平かならず。此日の道程を案内者に尋ぬれば健脚家ならんには五時間にて達すべし。之れより一の峠を越え猶ほ佐良越を越ゆれば一條の林道あり温泉に達するまで殆んど迷ふことなけん。案内者の言の殆んど頼むべからざるは二日間の旅行にて觀破したれ



ども、おどくも亦其の言を輕信し、さばかりの路ならば余は必ず三四時  
 間にして達し聊か胸中の不平を遣らんと十分なる食糧をも携へずし  
 て出發す。時に午前七時余獨り温谷峠(ぬたにたうげ)カリヤス平(たひら)に登る。一面根曲  
 り竹の生え茂れる間を廻り峠の頂上に登りしとき、午前八時二十分海  
 抜約千八百米突。今日も亦雲霧多く遠山の展望全く自由ならざりし  
 も白雪の皚々たる中ノ谷の溪谷を隔て、所々に残雪ある連嶺あり。  
 半腹に縷の如き細徑峰に沿ふて上方に向へるを見る、余以爲らく之れ  
 佐良越なるべしと、四圍の風景の雄大なるを見て唯壯美の感に打たる  
 中ノ谷に降りしとき、午前八時四十分、残雪の破壊せる間に清流の潺湲  
 たるを見る。谷底は一面岩石の磊塊たる積なれば、今迄判明なりし細  
 徑全く絶え、温谷峠の頂上より望見せし細徑に登る能はず、谷の上下二  
 三町の間を探りたれども之れぞと思ふ登路なし、止むなく何所までも

と谷を上ること三四丁右方に行人の足跡らしきを發見し、之れより峰  
 に登る斷雲の間より時々輝々たる日光を仰ぐ。ムントリスミレ、タカ  
 チスミレ等の開花せるもの多し、其の他數十百種の高山植物、残雪の側  
 に満開し一面御花畑の觀を呈す。暖き陽光を背に擔ひ雪上を渡る冷  
 風に面を拂はせ下界ならば確に陽春三月の景、屢々残雪を横過して頂  
 に近づくや、路傍に巨岩あり乃ち

九時五十分此時を越ゆ……………鳥嶺

と書す。海拔約二千二百二十米突、佐良越の最高點は海拔約二千二百  
 八十米突、彼の佐々成政が從者數人を率ゐて超えしは此處か。

野史に曰く「秀吉和を信雄に乞ふ、信雄之れを許す、成政以爲らく、信雄、弱事  
 を共にするに足らず、宜しく家康と好む、結び以て中原を圍るべし、乃ち兵を  
 罷め、病と稱し、潜かに左右數人と深雪を凌ぎ、左、其、左、其、越を踰え、間道馳驅す、  
 二日、源松に抵り云々」



梟雄成政幾多の野心を抱きて此時を越えし當時の感慨果して如何。  
 峠の頂上に來りしとき雲烟倏忽として襲來し、搖曳浮動眼前を掠め遂  
 々然として天地を蔽ひ、遂に咫尺を辨ぜざるに至る。峠を下る途中に  
 熊及兎の食をあさりし跡多くを見出しぬ。峠の下には林道ありと聞  
 きつるに、溪流のほとりに出でしとき路全く絶えたり。漸くにして對  
 岸に幽かなる細徑を見出し早く林道に出でんものと、全速力にて溪間  
 を下る。行けどもく、林道はあるか動もすれば細徑絶えて之れを尋  
 ぬるに意外の時間を費せり。溪流を下ること十五六町と思はれし頃  
 路全く絶えて進む能はず。此に於て余以爲らく峠の下に林道あるべ  
 しと云ふに却て道の消えたるは之れ中ノ谷より峠を登る際誤つてあ  
 らぬ身に踏み迷ひしならん、今越えしは佐良峠にはあらず此川は湯川  
 にあらざるならん。足を早めて來たりし事なれば既に温泉の附近に

達せざるべからざるに却て路の消えたるは必ず路に迷ひたるに疑な  
 し。然らば余は今如何なる方法をか講ずべき余の取るべき方法三あ  
 るのみ。

一、之れより再び黒部の小舎に歸りて残り置きたる米を糧とし、明朝  
 中ノ谷にて眞の路を尋ね、立山温泉に至らん。然れども之れより  
 歸れば夜に入らざれば黒部の小舎に達する能はず、安全なる方法  
 なれども容易の事にあらざるなり。

二、一度見失ひし細徑を尋ね、之に従つて行かば必ず人家に達するこ  
 とを得べし。然れども亂草の間幽かなる路を見出すは時を費す  
 こと非常なり。

三、何處までも此溪流に沿ふて降るときは、最短時間にて人家に達す  
 るを得べし。



余は第三の方法を探らんと決心し溪流を下る。漸々下るに従つて右より左より合流する溪流多くして水量次第に増加し始めは左右自由自在に徒渉することを得たりしも今は容易に徒渉すること能はざるに至れり。下ること數町にして水深くして水中を降る能はず左右の絶壁險絶にして横過するに由なし此所に至りて第三の方法は實行すること能はず。仍て第二の方法を探らんと欲し幾多の困難をなして下りし溪流を前と全様なる辛苦をなして引き返せり。此時食糧は僅かに少量の握飯あるのみ防水防寒の用意なければ斯くして此谷に彷徨し日没に達せば今宵は何所かの岩蔭に一夜を明さざるべからず防寒具なしに防水具なしに食糧なしに……眠らず……食はず……休まずに歩み明日午前中に人に遇ふこと能はずんば如何に健脚なりとも遂に倒れざる能はず匹夫の勇にはやりて今臍を噛むの悔あり倒死遂

に免がる、能はずんば願はくは此無人の深谷を出て、行人ある道路の附近までも出たしと思へり。漸くにして細徑を見出し前の絶壁をも横過することを得たり。午後零時三十分、オホイタドリの叢中に入るや大に驚けり此叢中に人の頻繁に往來せる痕跡あり此深山幽溪何人が斯く通過せしにや思ふに此上方必ず測量員等の滞在せるものありて人夫が此所を往復せしなるべし。猶ほ足を早めて降ること數町溪流のほとり砂上に狼籍たる足跡あり傍らに巻烟草の落ちたるあり之れを見て心大に安んず。下ること數町靴の足跡あり何人か靴にて來れる此地遠からずして人家あらんと始めて蘇生の思あり。午後一時半谷幅廣くして平坦なる所に出づ濃霧の内より突如と現はれし數棟の人家これ實に立山の温泉なり。余が進み來りし路は誤らざりしなり人夫は我を詐れり否數年前は確かに林道ありしならんしか



も今は全く破壊す、悪絶を極むる湯川の谷、高頭大平の兩氏克く来るや否や、若し夜に入りて来るなくば、人夫を雇ふて迎へしめざるべからず、余はしきりに兩氏の來らんことを祈れり。午後六時一行悉く到る疲勞困憊を極む。高頭大平二氏は路の悪絶なるに驚き、鳥嶺如何に健脚なるも此路に迷はざる能はざるべし、若し温泉に到り先着し居らずんば、直に搜索隊を出ださんと。然るに既に到着し居りしを見て、一同呆れ顔なりしもあかし。

途中オホイタドロの内に行人の跡ありしは、浴客の此地より新湯の噴出口に往復せし路なりしなり。立山温泉は湯川の岸にあり、輝石富士岩の裂罅より湧出するもの硫質泉にして五十餘度の温度あり。浴槽は湯川の兩岸にあり、狹隘不潔を極む、客室は湯川の南岸稍々廣潤なるところにあり、事務所及他に一棟の新築家屋を除くの外は、皆不潔にして

して薄暗き室内に蝨爾として老若男女の集合せる様、見るからに不快を感ず。浴舎は毎年六月五日に開き十月五日に閉づ、其の間百二十日浴客の滞在するもの多きは四五百名、少なきも百名を降らずと云ふ。さすがは海拔千二百五十米突の高地、山隈所々に残雪を見る、三伏の候苦熱を覺えず。大鷲山、小鷲山のほとり血に鳴く吐鵲友を呼ぶ猿の叫びを聞かば、如何に心なき人々も轉た斷腸の感に堪えざらむ。小鷲山は安政五年二月の大震に大半壊崩して、土砂湯川の谷を埋めて、こゝに漫々たる湖水を現出し、四月に至り其の一部缺損して濁流汎濫し、下流常願寺川の沿岸被害を被ること村落百五十、其の慘狀を想像するとき、は夏猶ほ肌を寒さを覺ゆ。此地にて大町の人夫と袂を分ち、新に三人の人夫を依頼し、立山に登り富山市に到らんとす。



二越中立山

鳥嶺

上

立山賦一首並短歌

大伴家持

天さがる  
越の中  
山はしも  
川はしも  
皇かみの  
新川の  
常夏に  
帯はせる

夷に名懸す  
國內ことごと  
しとにあれども  
さはにあれども  
うしはきぬます  
その立山に  
雪ふりしきて  
片貝川の

清き瀬に  
立つきりの  
ありがよひ  
よそのみも  
萬代の  
いまだみぬ  
音のみも  
立山に

朝宵ごとに  
思ひすぎめや  
いや年のほに  
ふりさけ見つゝ  
かたらひぐさと  
人にも告げむ  
名のみも聞きて  
ともしぶるがね  
降りおける雪を  
常夏に  
みれどもあかず  
かむながらならむ  
川の瀬清く行く水の  
絶ゆることなく  
ありがよひみむ



四月二十七日大伴宿禰家持作之  
敬和立山賦一首并二絶

大伴池主

朝日さし  
神ながら  
白雲の  
天そり  
冬夏と  
白たへに  
古へゆ  
こゝしかも  
たまきはる

そがひに見ゆる  
御名におはせる  
千重をふしわけ  
高さ立山  
わくこともなく  
雪は降りおきて  
ありさにければ  
いはの神さび  
幾代へにけむ

立て居て  
峰たかみ  
落ちたぎつ  
朝さらず  
ふゆされば  
雲をなす  
たつきりの  
行く水の  
萬代に

見れどもあやし  
谷を深かみと  
清き河内に  
霧立ちわたり  
雲をたなびき  
こゝろもしぬに  
思ひすぐさず  
音もさやけく  
言ひつぎゆかむ  
かはしたえずば  
常夏に  
けずてわたるは  
神ながらとぞ

立山に

降りおける雪の

常夏に

神ながらとぞ



落ちたぎつ 片貝川の たえぬごと

いまみる人も やまずかよはむ

八月十一日午前六時三十分

立山温泉の客舎を發し、浴槽の附近にて危き釣り橋を渡りて松尾峠に向ふ。急阪眼前に起り、登攀頗る艱む。ノウゴウイチゴ、イブキジャコウサウ、タテヤマウツボ等の開花せるを見る。ムラサキアキワリの如き濃紫唇形の花冠皆其の美を稱せざるなし。阪路の中途より昨一行の困難せし湯川谷の上流を願れば新湯のあたり白烟の搖曳を見る。急阪登り盡せば海拔約千八百米突。之れより阿彌陀ヶ原より低丘起伏せる平原草短く、土黒く、沮洳の地多く、タテヤマリングウを見る。チングルマ、ミツイテフ等多し、余は其の植物分布の單純なるに驚けり。九時追分に達す温泉より二里半と稱す、此地にて富山方面よりの登路

に合す。立山參詣の導者陸續として至る、多くは白衣淨装、菅笠金剛杖の團躰、夜半蘆斷寺を出發して來りしもの立山中語先導をなす、立山にありては剛力を立山中語と稱す。追分より一里半鏡石に至る。漸く近づきて立山の連峰を仰ぐ、雄壯偉大群を抜くものは立山の主峰、其の右に淨土山及龍王岳の連嶂あり、主峰の左に別山あり、その北方直に雲漢を摩するもの之れ、劔ヶ嶽の峻嶺にあらずや、古來未だ人跡を印せず、早晚余が脚下に蹂躪せんとは、海峰兄の言豪宕他に下らざる兄が面目躍如たり。此嶺を槍ヶ岳に比せんか、彼れは隼鷹の小禽を搏たんとするもの、是れは猛鷲の悠々として巉岩の上に憩へるが如し、彼れは恐るべく、是れは近づく能はず、一は小一は大なり。富嶽に比せんか、彼れは透麗の一語之れを盡せり、今や俗塵將さに其の山嶺に達せんとす、是れは峻嶺峭壁、天に聳え昂々然として群小を近づけざるところ、跌宕峻拔、



王の威あり彼れは親むべく是れは馴るべからず。鏡石より一里にし  
て室堂に至る立山主峰の麓にあり間口十二間奥行五間尺角の巨柱六  
十五本あり周囲に石垣をめぐらす其の建築の堅固なる富士山上に於  
ける石室の比にあらずさすがは加賀侯の造營にかゝれるもの實に高  
山に於ける室堂の摸範的建築と稱すべし。此日室堂に泊せるもの二  
百七十名中語を合すれば三百名に垂んとする大衆廣き室堂も立錐の  
地なし其の混雑名狀すべからず乃ち神官に謀り其の一室に宿るに決  
す。然れども時未だ正午なるを以て一行輕裝主峰の頂を極め雄山神  
社に賽せんとす。二名の入夫を伴ひ室堂の附近より大殘雪を渡るこ  
と再三路は立山主峰の左側を上る。室堂より六七町にして一ノ越の  
小祠あり附近高山植物の開花せるもの多し左顧右眴しきりに花を摘  
む高頭大平の二氏既に二ノ越にあり。主峰と淨土山とを連続せる山

稜に立ちて南方を望みて歡呼す余も走て此所に至れば前面一帯の雲  
の海怒濤逆巻き狂瀾暴るゝところ日本アルプスの連峰或は難破船の  
橋頭の如く或は絶海の孤島の如く其の山巔を現はせる様壯美言語に  
絶す。二ノ越附近よりは路著しく急峻となり胸突き鬚剃とも稱すべ  
き難所あり山骨悉く露出し唯岩罅にイハキ、ヤウ、チシマキ、ヤウ、タ  
カ子スミレ、コケモ、ガンカウラン、トウヤクリンダウ、コメバツガザク  
ラ、イハウメ、ツラシマツ、ジ、ミヤマウスエキサウ、タカ子ヨモギ等の開  
花せるを見るのみ。三ノ越を登れば鎖あり。五ノ越に一小石室あり。  
附近に立てる參謀本部の三角點は落雷の爲めに半ば破壊せられたり。  
此所に於て皆芒鞋を脱し跣足岩角を踏みて絶頂に達す室堂より一里  
八町と稱す。絶頂は方僅に數歩社殿南面す渾白古樸神寂びたり。祭  
神は伊邪那岐尊及手力雄命なり。玄冠白衣の神官白幣を執りて神文



を誦し余等の爲めに祓をなし授くるに一盞の神酒を以てす。嗚呼今九千八百尺の天梯攀ぢ盡して身は北陸第一の名山の頂きにあり。神風帽簷に吼え衣袂を捲くもの之れ太古の風。我れより上は天の蒼々と日の赫々とあるのみ。脚下には颯々たる長隧蓬々たる白雲あるのみ。須臾にして雲霧濛々全く下界を鎖し巖に斷雲の間に出没せし日本アルプスの連峯今は一も見ること能はずして所謂天下の大觀を恣まゝにすること能はず無限の遺憾。然れども近く北方に連れる大汝別山劍ヶ嶽の雄峯を睫眉の間に眺めては空しく下山すること能はず之れより大汝を経て別山に到りよし劍ヶ嶽の隣响を踏む能はざるも其の附近に達して室堂に歸らんと之れを神官に謀るに難事にあらずと乃ち大汝に向ふ。時に午後二時半岩石の磊砢たるところ其の稜角を踏むて進む路或は通ぜるが如く或は絶えたるが如し屢々危険を犯

して大汝の峰頭に達す此に又一祠あり雄山神社の社殿を改築する際遷座するところと云ふ。之れより別山に向ふ富士の折立附近残雪多し。行者返り抱石等の難所あり岩屑の珣々たる間幽かなる人跡を尋ねて進む。時に天風虚空を振盪して飛霧斷雲岩角に吼え、全山爲めに動くかと疑はる。斷雲の眉間を掠めて去るものは素車白馬の神仙俗者の靈域に近づくを怒れるが如し。濃霧の爲めに咫尺を辨せず右か左と迷ふ内に自己の位置さへ定かならねば羅針も用をなさず一行五名五裡霧中に彷徨す。人夫の一人は斷雲の間より室堂の方面とも思はるゝ方に偃松の綠氈の如くなるを見て直に之れより下らんとす余は偃松の恐ろしさを説き偃松中を降らんよりは寧ろ再び頂上に引き返して降るの安全なるに如かざるを主張す。然れども時既に四時頂上を廻はらば途中暗夜となり危険云はん方なかるべし。余附近を探



りて確かに人跡と思はるゝものを發見し一行を招きて之を示せば皆  
 人跡たるを認む即ち此所より降る。後に此所の大走りなる事を知れ  
 り大走りは富士の走りと同様沙中を直下するに沙と人と共に走り滾  
 り々として止まるところを知らず。既にして大残雪の谷を埋むるあり、  
 斜傾急峻表面滑らかにして急險なり。氷雪盡きて石運斜なり賽の積  
 之れなり所々に石佛あり一面に小石の積まれたるものあり其の幾百  
 千なるを知らず愛らしき稚兒の爲めに父の積みしもあらん死せる弟  
 の爲めに兄の積みしもあらん余も二塔を作る。此附近に玉殿窟あり  
 と聞けども時遲きを以て至らず大走りの邊には黒百合あり然れども  
 濫獲せし爲め今は容易に得べからず。黒百合は左の傳説によりて俗  
 間に知らる。

佐々成政立山の佐良佐良越えを越えて信濃甲斐駿河遠江尾張を経て歸國

するや謬を信じて愛妾早百合及び其の一族十八人を斬殺す早百合共其だ之  
 れを怨み死に臨みて立山に黒百合咲かば佐々家滅亡せんと罵り叫びしと  
 か其の後天正十六年淀君の用ひ給ひし黒百合の挿花因となり遂に身を殺  
 るし家を亡ぼすに至れり  
 賽の積より溪流に沿ひ水を涉り雪を踏みて室堂に歸る時に午後七時  
 三百余名の宿泊せる室堂の雑沓一方ならず余等は神官の室にあり標  
 本を整理し了りて毛布に全身を包み爐邊に横はりしは午後十一時半  
 僅に一睡せしに不意に起れる夜半の叫喚  
 叫喚………大叫喚  
 何………何  
 地震?………地獄谷の爆發?  
 水……水……水……けたまましき叫聲  
 水……水……氷雪深き山巔何の水ぞ。



火事……火事！

火影周囲の幕に映じて明白晝の如し。

三百名二個の出口より先を争ふて堂外に躍り出づ。混亂又混亂之れ多数の菅笠吳座等を掛けて一同眠りしが、夜半燭火之れに移りて火を失せしなり。然れども幸に大事に至らず、一同再び寐につきしは翌午前一時半。

中

立山再登記

八月十二日午前三時。

板聲を相圖に三百有余の参拜者皆室堂の庭前に出づ。神官が登山者の郷貫姓名を呼べば、皆應と答ふ。人員の點檢了りて、白衣の神官玄冠淨鞋白幣を振つて先登す衆後に従ふ。四圍未だ黑暗々星斗闌干たり。

余等亦従ふ高頭氏曰はく、本日亦宇内の大觀を恣まゝにすること能はずんば、其の目的を達するまで滞在せんと、大平氏と共に之に讚す。前日と同一の登路を取りて再び立山の絶頂に向ふ。一ノ越二ノ越を経て路險となるや、皆口々に六根清淨を唱ふ、前後呼應魚貫して進む。登山者の多くは越中の青年なり、越中の俗男子は必ず一度此山に登らざるべからず、又同村より數名一團となりて登山するや、立山の絶頂を極め直に下山し先登第一郷社に賽するを以て榮となす、若し疾病疲勞の爲め途中に倒るゝ者あるも神罰となして願ふことなしと。今此等の青年を見るに、何れも元氣の盛なる意氣衝天の概あり。五ノ越に達せるは午前四時、東天漸く紅なり。絶頂は二十名内外を座せしむるに過ぎざれば、一同先づ石室附近に集合し、順次社殿に参拜す、神官爲めに祓をなす、神官が撃つ天鼓の響き、藜々として全山に響く。既にして朝暾



東方の横雲を破り、躍然として昇り、天地始めて清明なり。高山に於ける日出の光景、壯絶快絶然れども、此大観は富士に於て、白馬に於て、槍に於て、御嶽に於て、皆之れを見ることを得べし。獨り此立山の頂上にあらずれば、見ることも能はざる天下の偉觀、宇内の壯觀は何ぞや。所謂日本アルプスの連嶽を眼前に擴げて、一目の下に達觀せしむることを得るは、秀麗芙蓉峰の頂にありても、險絶槍ヶ嶽の頂に於ても、雄大白馬の頂に於ても、見ることも能はず。嗚呼、一度立山の峰頭に立ちて、此大觀を恣まゝにすること能はずんば、口に日本アルプスを説く勿れ。山を愛するの士願はくば、必ず一度立山の絶頂を極めよ。此壯觀偉觀は筆にて傳ふる能はず、口にて説く能はず。北方に近く聳えたる大汝劔ヶ嶽は、昨既に之れを説けり。其の右方遙かに見ゆるものは、白馬の連山……白馬連山。看よ中央に高く東南著

しき絶崖をなし、後方の傾斜稍々緩かに、其の姿勢猛獅が南方の天を仰ぎて吼ゆるが如きもの之れ擬ふ方なき白馬の主峯。其の後方にある一塊は、越人の所謂朝日嶽。白馬の右に鐘ヶ嶽を見る、立山より見たる其の山勢何ぞ夫れ溫和なる。之れより針木峠附近まで綿々たる北部日本アルプスの連嶽たとへば、牧野に群羊の背を見るが如し。後立山祖父ヶ嶽、嶮然一頭角を現はせり、妙高戸隠等の各峯皆指點すべし。淺間山も烟を見る能はざりしも、山勢によりて明かに之れを知るを得たり。其の右に入ヶ嶽を見る。其の右方は之れ甲斐の駒ヶ嶽、鳳凰地藏の山塊ならん。八ヶ嶽及駒ヶ嶽の中間、八ヶ嶽に接近して聳ゆるものは、即ち芙蓉峯。駒ヶ嶽の右方は之れ白峯か赤石か。眼を轉じて南方を見よ、一目して知ることを得るは、槍ヶ嶽なり。其の左に大天井常念の山塊、雲烟の間に模糊たるもの之れ木曾の駒ヶ嶽にあらざるや。槍ヶ嶽の



右方殆んど重復して、一は近く、一は稍遠きもの穂高及乗鞍なり。笠ヶ嶽の圓錐、其の右に聳え、笠ヶ嶽と乗鞍との間に遠きは御嶽の絶頂槍に近く、鷲羽あり、薬師ヶ嶽は既に接近せるを以て手以て其の面を撫すべし。正西に巨鯨の背の如き加賀の白山を望む。日本アルプスの峻嶺悉く一目の下にあり、余は再び叫ばざるべからず。

宇内の壯観。天下の偉観。

神官余等に告げて曰く、峰頭今日の快晴を見る今年に入りて未だ曾てあらざるところ、斯の如きは一年に一日、二年に三日、之れ有るに過ぎずと。余等今朝此頂きを極めて此大観に接す、死すとも恨なし、思ふに余等は皆良月吉辰に生れしならん。余は大平氏と共に大汝に至り、富士の折立に到り撮影す、得たるところの書印は之れ珍中の珍秘、藏して容易に人に示さず。山岳を愛して、寢食を忘るゝ、海峰兄は、絶頂に踞した

るまゝ、此大観を恣まゝにして酔えるが如く、一步も動かさず。午前九時余等は再び頂上に歸り、高頭氏を促して下山し、淨土山に向ふ。山草中の稀品、チヨウノスケサウは、始めて此山にて發見せられしもの。余は八ヶ岳、鍵ヶ岳、槍ヶ岳にても得等に於て屢々之を採集したれども、此山に於ける産地の状態を知らんと欲し、終始注視したれども、未だ發見せず、所々搜索せしも、其の片影をも認むる能はず。暫時休憩して或は山勢の雄を説き、或は植物の奇を語り、昨夜の騷擾を想起しては、一同失笑を禁ずる能はず。斯くて淨土山の頂を極めんもの、と出立すると、今迄座せしところを見しに、笑止や一面に之れチヨウノスケサウなり、大に自己の愚を笑ふ。之れより峯に登り、困苦を極めたる針木峠、黒部の谷、佐良越え、湯川の谷を俯瞰す。新湯の白烟、今日も搖曳として昇る、黒部の谷、湯川の谷、具さに苦辛を嘗めしところ、今は互に指して談笑



す彼の苦ありてこそ今日の愉快の益々愉快なるを思ふ。高山の攀登は愉快の極困苦の極其の快を知りて彼の苦を知らざるものは共に語るに足らず。彼の苦を知りて此快を知らざるものも共に語るに足らざるなり。浄土山は高山植物に富む余は此所にて採集し内に二新種(種名調査中)を得たり。余等の植物を捜査せる間に高頭氏は獨り頂上の小祠に賽す室堂に歸りしは午後一時二十分。地獄谷は室堂の北方八町午後二時事務員の案内にて地獄谷を看る。地獄谷は室堂の北方八町許の所にあり所謂爆裂火口にして天保十年四月廿九日破裂して灰砂を降らし安政五年二月にも爆裂せしことあり今も猶除勢を存す。途中緑ヶ池美久里ヶ池あり水面静穏一波起らず静かなること油の如く其の色藍靛。地獄谷は一帶低凹の地周圍二三十町もありなれ一面に硫黄の堆積せるものありて滿地黄色所々より盛に硫氣の噴騰せるを

見る、鞆として濁水を噴出するあり沸々として地下に脹ふべき怪音を聞き足蹠に熱を感ず試みに杖を立つるに到處より噴氣す案内者は此所に八百三十六地獄ありと云ふ此形容によりて名付けしもの鍛冶屋地獄は硫氣洞の周圍に高く烟突の如く硫黄の堆積せるもの百性地獄とは汚濁の熱湯高く噴出するところ血の池地獄とは溜水の赤色を爲せるところ其の他無間地獄あり八萬地獄湯屋地獄曰く何曰く何一々枚擧に遑あらず。古來俗間にては立山地獄に至るときは既に世を去れる父母妻子にも再會することを得るものとの迷信ありしなり今も一度此地に足を入るれば身に十惡の覺えなきも一種恐怖の念を禁ずる能はず。事務員は余等を其の西北方人の行かざる所に導く導かざるに到り見れば此所に一の浴湯あり唯地を掘りしのみ即ち衣を脱して入浴すあたりに硫烟白く渦巻き昇るところ白雪の皚々たる



傍ら悠々して塵垢を洗ふ。午後五時室堂に歸る途中ムシトリスミレの盛に開花せるを見る。余等既に立山の大觀を恣まゝにし地獄谷をも探る翌日は十七里の山道を井せ下りて富山市に達せんとす。午後八時半昨夜と同じく一同爐邊に眠る。

下

八月十三日。

今朝も亦登山者の騒がしきに午前三時に起き出て直に下山の用意をなし全四時出發天未だ暗らし。畜生原大谷下市場鏡石碁石坂衣掛松など案内者の説明耳にも入れずひた走りに走りて獅子ヶ鼻と稱するところに達す。一方谷に臨みて巨岩の突出せるあり其の形獅子の巨口を開きて吼ゆるに似たり此の鼻端に達するものは善男善女なるべしとは案内者の言試みに登りしも一の奇なし。これより谷に降る

ところ鐵鎖あり一の谷と稱す余等は立山頂上の鐵鎖をも無用の長物と信ずるものかばかりの谷に鐵鎖を懸けたるは少しく見戯に類す或は之れによりて立山の險を示さんとするにもあらんかなれども立山の眞價豈鐵鎖の有無に關せんや。谷中を下ること二三丁二ノ谷に到り左方の崖を登れば一望開濶なり阿彌陀ヶ原少しく進みて追分けに達す。低平なる野地所々に潜水あり二三の莎草科植物を産す俗に餓鬼の田と稱す。室堂より下ること三里余にして路の左方に茅舎を見る弘法の茶屋之れなり老翁ありて茶を嚮げり清泉あり弘法水と呼ぶ。追分附近より路泥濘を極め此小屋の附近に來りて益々甚だし細逕藥碾の如くにして汚泥脛を没す失脚轉倒せしこと數回肩と曰はず腰と曰はず一面の汚泥如何なる健脚も此惡路に閉口せざるものなからむ。一步一步慎重なる注意をなすにあらざれば進むこと能はず。而して



此悪路前後數里途中夫婦杉銅冠杉等あり。桑谷の前阪及後阪を過ぎ  
て伏拜み附近に至れば右方遙かに藜々たる響きを聞く恰も遠雷の如  
し草莽を分けて入ること數歩前面の深谷を伏瞰すれば稱名川の早乙  
女嶽の絶壁にかゝれるところ一大瀑をなすを見る稱名瀧之れなり。  
稱名瀧は越人天下第一高さ百二十丈と稱す。然れども此所より伏瞰  
すれば只其上半を窺ふのみなれば未だ以て天下の偉觀と稱するに足  
らず。此行大平氏は此稱名瀧の勝を探らんが爲め蘆峴寺に止まり稱  
名川を遡り赤裸々たる赭褐色の崖壁に四段をなして隠然此瀧のか  
れるを見て稍々森嚴を缺くと評せり。之れよりカリヤス阪を下り山  
毛樺平に出て喬木天日を蔽ふところ路傍の樵屋に休憩す。山毛樺阪  
を下り行くこと一里路傍の窟内に熊野權現の小祠あり傍らに茶及菓  
子を擲げり。之れより藤橋を又一里と稱す。然れども火成岩の柱

狀節理の現はれたる材木阪草生阪黄金阪等の峻阪相次ぎて現はる。  
此方面より立山に登るの士必ず此阪路に於て閉口せざるもの殆んど  
なからん。黄金阪を降りて稱名川を渡るところに鐵條の釣橋あり名  
にし負ふ藤橋の趾なり。之れより路は全く人圈に出づ藤橋より一里  
にして蘆峴寺に達し神官佐伯氏方に休憩す室堂より九里時に午後二  
時半。大平氏は稱名瀧を探らんが爲めに此地に止まり高頭氏と余は  
約八里の長途を走せて富山に入り富山ホテルに宿す翌岩瀬より漁船  
にて直江津に歸る。

### 針木峠及び越中立山登路案内

一信州大町より野口を経て越中立山温泉まで約十五里と稱すれども  
之は昔道路ありしときの里數なるべし。其の路今は全く破壊し多



く溪流を上下する故に約十八里位はあるべし。三日間の行程なり。

二、人夫は大町の西方野口の者にて最近に通過せし事ある者を雇ふべし、案内者無くては越ゆる能はず。

三、第一日は成るべく峠の下まで進むべし、大町より峠の頂上までは約七里位あるべし。

四、第二日には峠を越えて黒部川を渡り黒部小舎に宿すべし、峠の頂上よりは約四里半はあるべし。

五、黒部川は水少なきときは、鐵線ある上方二三町の所にて徒渉する方却て危険なからん。

六、黒部小舎より立山温泉までは約六里、弱湯谷峠及佐良越えを越え湯川谷を下る、案内者を要す。

七、立山温泉には米味噌等の必要品あり。

八、立山温泉にて立山登山の案内人を雇ふときは、立山中語の鑑札ある者を雇ふべし、荷物四貫目以下一日賃銀五十錢。

九、立山温泉より室堂まで五里と稱す、松尾峠の急阪の外は悪路とは云ひ難し。

十、室堂に到着せしときは、山鏡と稱し四十錢を社務所に納むべし、山鏡は雄山神社までの案内料と室料なり、幾日滞在するも差支なし。

十一、室堂より頂上まで一里八町。

十二、頂上より大汝別山等を経て室堂に歸るには、約三時間以上を要す。

十三、室堂より地獄谷まで八町。

十四、立山頂上より芦峠寺まで九里と稱す。

十五、室堂一里、鏡石一里、獅子鼻一里、追分一里、不動堂一里、ブナ坂一里、熊野権現一里、藤橋一里、蘆峠寺。



十六室堂と藤橋までの間には弘法小舎、ブナ平小舎、熊野権現等二三の小舎あるのみ、無人の境なり。

十七、蘆峠寺にては立山神官の宿坊に宿泊することを得べし。

十八、蘆峠寺より上瀧まで三里半、上瀧より富山市まで三里廿三町。

### 針木峠及び越中立山植物目録

信州大町より針木峠を越え立山の頂を究め越中蘆峠寺に至る三十余里の深山幽溪を跋涉し観察せしものなり。尤も針木峠より黒部川に至る間に採集せし植物は人夫が暗中黒部川を徒渉せし際全部流失せしを以て記憶によりて之れを記せり。越中立山は有名なる植物産地なれども高山植物の産地としては到底白馬等と日を同じうして語るべからず。其の越中方面特に阿彌陀原の如きは其の植物分布頗る單純ミ

ヅイテウ、チングルマ等の數里に亘りて繁殖せる有様吾人をして慨然たらしめたり。立山に於て二種の新種と思はるゝものを得たり（理科大學牧野氏の手許にて種名調査中）

#### 水龍骨科

- |            |         |            |
|------------|---------|------------|
| しゆめくしだ     | やぶそてつ   | こがねわらび     |
| へびのねごぎ     | いはひめわらび | こたにわたり     |
| みつてうらほし    | はていしだ   | いはてんた      |
| おほほのゐのみとろろ | さしだ     | ひめかなわらび    |
| いはへこ       | おくやまからび | おほみやまいぬわらび |

#### 瓶爾小草科

- |       |          |
|-------|----------|
| はなやすり | なつのはなからび |
|-------|----------|

#### 石松科



松柏科

ひかげのかつら  
まんねんすぎ

すぎかつら  
ひもかつら

たかねひかげのかつら  
たうげしほ

はひまつ

ねぞ

みやまねぞ

つが

こめつが

くろぐ  
とうひ

もみ

いちる

からまつ

禾本科

とだしほ

ぬかほ

すいだけ

ねまがりだけ

きつねがや

いはがりやす

いはのがりやす

ひめかりやす

おほあぶらすゝき

みやまかうほろ

みやまあはがり

こめすゝき

みやまこめすゝき

みやまあぶらすゝき

えぞぬかほ

やまぬかほ

ひめこめすゝき

こぶなぐさ

やまかもじぐさ

やまあは

うしのけぐさ

おほとほしがり

どぎやうつなぎ

莎草科

いとまんすぎ

かやつりぐさ

まんすぎ

こいめがやつり

たてやますぎ

あぶらがや

あいほさう

ひめかんすぎ

ひめすぎ

みやまなるこすぎ

さぎすぎ

じゆすぎ

かはすすぎ

しやうじやうすぎ

みたけすぎ

ひめしらすぎ

わたすぎ

あせすぎ

はりすぎ

みやまころすぎ

みやまたぬきらん



こたぬまらん

徳心科

かろかろまきせり

くるみくりせせせり

たかぬまらんひさ

みやまらんせり

みやまぬかほしせり

天南園科

らんせいのてんなんかん

百合科

しやうじようせいかほ

うせせり

つるほ

おほほのたほしせり

おほほ

ひさほのせせり

つせせおもと

しせせ

おせせせり

こほしせり

えんせり

おせりのせらん

くるみほつくほ

たまがほほとせせ

おせりのせらん

ころゆり

きんかうんか

くるみゆり

ひめくわんせり

いほせせり

おほほせり

きよせ

こほのゆり

おほほ

蘭科

おほほのどんほせり

こほのどんほせり

おほほ

おほのせがら

おほのせがら

のびせせり

とませり

せせり

しやうせらん

きそせせり

おほせせり

おほせせり

ふたほらん

こふたほらん

楊柳科

いはせせり

おほほせせり

おほほせり

樟木科



はんのみ

くまして

やまはんのみ

おほほみぬほり

かはらはんのみ

さばしほ

しらかんほ

はしほみ

いぬして

さうしかんほ

穀斗科

ぶなのき

おほなら

くり

かしは

くぬぎ

こなら

桑科

つるかうぞ

蓼麻科

めやおまき

むかごいらぐさ

うばとみさう

いらぐさ

馬兜鈴科

かんあふひ

うすほさいしん

蕁科

いたどり

ひめすいほ

おほいたどり

うらじろたて

じんそうすいほ

いはたて

石竹科

かはらなてしこ

みやまみよなぐさ

たかねなてしこ

いはつめぐさ

しなのなてしこ

こほのつめぐさ

木蘭科

こぶし

薔薇科

かつら



毛茸科

ほたんとる

あやあはとしよつる

くさほたん

さらしなしよつ

もみじからまつ

ひめからまつ

やまおたまつ

やまとりかぶと

れいじんさう

おほれいじんさう

あやあまんほろび

はるさんいさび

みつほわうれん

ひめいさび

木通科

あけび

みつほあけび

小蘗科

いかりさう

さんかえう

とりとまつ

梅科

くらもじ

だんころほろ

十字花科

すかしたごほろ

あやあたねつけほろ

あやあがらし

あやあはたさほ

あじはたさほ

えぞはたさほ

おほほたねつけほろ

菜菔菜科

むらせんごけ

景天科

めのまんねんどさ

いはねんげ

ズんけいさう

きりんさう

あやあまんねんどさ

虎耳草科

とりあしよつ

くらもじさる

じょうじみ

はいくわうつぎ

あはもりしよつ

うめほろあし



しらびげさう  
やぶるまさう  
あらしごさ

だいもんじさう  
づたやぐし

くろくもさう  
しこたんさう

醫藥科

たいこんさう  
ちんごるさ  
しもつけ  
たかねなゝかまど  
うしごろし  
みやまきんぼり

みやまだいこんさう  
ちやうのすけさう  
こまがたけすぐり  
なゝかまど  
くまいさご  
たうちさう

いはまいた  
はいろほち  
あづきなし  
いぬまくら  
こほのおゆらさ  
おれもか

鹽科

いはわうさ

もめんじる

のちんち

いはふぢ  
猪牛児科

かはらけつめい

はくさんふうろ  
酢漿草科

あかぬまふうろ

あうりさう

みやまかたほみ  
芸香料

みやましきみ  
大戟科

たかとうだい

ゆづりは

なつとうだい  
岩高蘭科

がんかうらん

毒空木科



蕨類科

どろろつぎ

あつぎやう

漆樹科

つたうるし

冬青科

つるつぎ

衛矛科

にしきん

くろじり

省注油科

みつたうつぎ

そよね

あつぎ

つたうるし

つるつぎ

にしきん

くろじり

みつたうつぎ

おがらばな

はなかへて

うりはだかへて

葛根科

いたやかへて

てつかへて

うりはだかへて

七葉樹科

とりのみ

鳳仙花科

まつりあな

酸辛科

くろやなせ

葡萄科

やまぶたう

おがらばな

はなかへて

うりはだかへて

とりのみ

まつりあな

くろやなせ

やまぶたう

あびしる

あびしる



獼猴桃科

またゝび

しらくちづる

旌節花科

きふじ

金糸桃科

おとぎりさう

こおとぎり

ひめおとぎり

重葎科

おほほきすみれ

きはなのこまのつめ たかぬすみれ

千屈葎科

みそはぎ

柳葉葎科

ひめあかほな

いはあかほな

みやまたはたて

五加科

みづたまさう

たにたて

こしあぶら

はりぎり

はりあま

ちくせつはんじん

とちはんじん

繖形科

のだけ

しろうど

たうき

いぶきぜり

しらぬはんじん

やませんまう

やまはんじん

はくさんほうふう

山菜薹科

みづき

ごぜんたちほな

やまほうし

うりのき

令法科



りやう

鹿野草科

しやうやう

しやうやう

しやうやう

しやうやう

しやうやう

石南科

しやうやう

しやうやう

しやうやう

しやうやう

しやうやう

しやうやう

しやうやう

しやうやう

しやうやう

しやうやう

しやうやう

しやうやう

しやうやう

しやうやう

しやうやう

岩梅科

しやうやう

しやうやう

しやうやう

や

や

梅草科

なんきん

なんきん

齊敷果科

えんのみ

木犀科

いほたのみ

馬錢科

あざうつせ

藜蘆科

おやまりんだう

つるりんだう

あついで

はるりんだう

たうやくりんだう

あやまりんだう

たてやまりんだう

あやまりんだう



夾竹桃科

ていかづら

蘿摩科

いけま

唇形科

あまのたむらぎ

いぶきじやかうぎ

しろかはみどり

しろぬ

むらさきめきり

らしようもんかつら

こしろぬ

たてやまうつほぐれ

てんにんぎ

文藝科

おほほみやほつぎ

みやまこゝろ

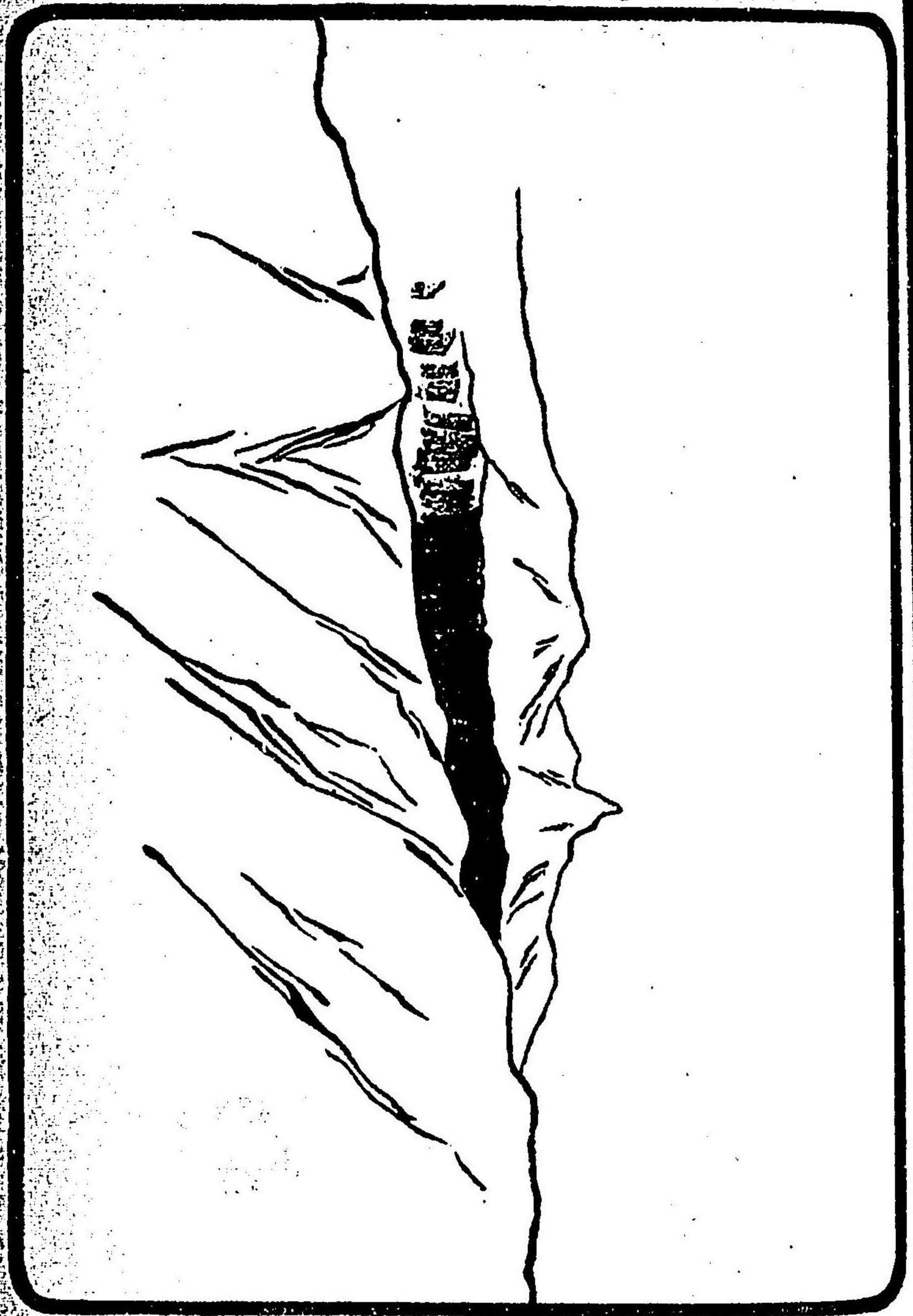
みやまこゝろ

よつほしほがき

こゝろ

ゆきわりしほがき

狸藪科



近所山常



むしとりすみれ

列當科

おにく

なんぼんぎせる

茜草科

きぼなのかはちまつば

あかね

はしかどさ

忍冬科

がまづみ

むしかり

みやましどれ

敗醬科

はくさんをみなへしかのこさう

桔梗科

つるにんじん

いはまきゝやう

ちしまきゝやう

ひめしやじん

あくしましやじん

つりがねにんじん



菊科

ほたるぶくろ

そはな

ひよどりばな

ふちはかま

をぐるま

かにかうもり

やぶれがさ

くるまはばごま

かうぞりな

みやまかうぞりな

たかさぶらう

さわぎく

まきん

おとこよもぎ

たかねよもぎ

えぞむかしよもぎ

ひめよもぎ

むかしよもぎ

むみぢがさ

よぶすまごう

まんだるま

あきのきりんさう

あま

たうひれん

きつかうはごま

やまぼくち

三第三回横断

(槍ヶ岳及常念山塊)

鳥嶺

パミール高原は世界の屋梁たり、信州は夫れ日本のパミールか。特に  
 信飛境上は山岳雄峻、溪谷幽邃、山を愛するの士は一度踏破すべきの地  
 なり。其の南方にありて雄姿四隣を壓するものは夫れ木曾の御嶽か、  
 海拔一萬餘尺、欧州アルプス中のスタンサアホルンの雄峰にも似たり  
 とかや。其の脈蜿蜒北に走りて飛彈第一の大嶽と呼ばれたる乗鞍と  
 なり、高峻御嶽に譲らず。猶ほ少しく北するときは、崇岳嶺、一穂の鋭  
 鋒、峨々として雲漢を刺せるが如き槍ヶ嶽、實に之れが盟主たり、海抜一  
 萬四百尺、高さに於て富岳に及ばずと雖も、其の峰頭の奇抜なるは何れ  
 の山か、よく之れと雄を争ふものぞ。吾れ曾て八ヶ岳の高峰、赤岳の絶  
 巔に於て、或は淺間火口の附近に於て、或は白馬立山、大天井、燕岳等の頂



きに於て、此峰頭を仰ぎしとき、未だ曾て其の雄峻を歎稱せざることなかりき。嗚呼槍ヶ岳……槍ヶ岳百尺竿頭更に一步を進めなば、必ずや夫れ天に達せん。

槍ヶ岳の南に方りて穂高あり、峰頭鋸齒の如く、海拔一萬百九十六尺、遠く之れを望めば、數個の巨人頭を鳩めて天の秘密を語るが如く、或は數個の心臓を束ねたるが如し、此心臓に波立つとき、天地必ず晦暝ならん。

槍ヶ岳の西に笠ヶ岳あり、海拔九千五百尺、略圓錐形をなし、其の容姿の端麗なる多く、其の比を見ず、たとへば衣冠束帯せる美丈夫が朝に立てるが如し、之れを仰げば、自ら首の垂るゝを覺ゆ。

槍ヶ岳の峰頭より蒲田の谷に白雲の波立てるを隔てしカメラの内に、此山頂を窺さしとき、ピント硝子に映ぜし影の美しかりしは、今猶ほ忘れず、其の乾板を現

象して印畫を得たるとき、以爲らく、之れ世の人に見すべきものにあらずと。

槍ヶ岳の北に鷲羽岳あり、海拔約九千五百尺、余は其の東方高瀬川の谷を隔てし此峰を仰ぎしとき、一種恐怖の念油然而として胸中に起り、未だ其の何の故たるを知らず。

日本アルプスの峻嶺皆中腹以下美しき喬木帯の纏絡せるを見る、然るに東方より見たる鷲羽は、高瀬川の岸より其の峰頭に至るまで、赤裸々として鐵鏽色を帯びたる岩石の壘々せるを見るのみ、殆んど人跡なきの地、詳細に傳ふる能はず。

信飛境上槍ヶ岳、穂高笠ヶ岳、鷲羽等の掛まれるところは、北部日本アルプスの最高點、何物も彼等と其の雄を競ふ能はずとぞ覺ゆ……否……槍ヶ岳山彙の東に方り、高瀬梓の河谷を隔て、一步も譲らざる一團あり、常念山塊之れなり。

槍ヶ岳に最も近きを大天井岳となす、海拔九千



六百四十尺、其の右手を出して槍ヶ岳と握手せるところ、之れ高瀬梓雨流の分水嶺なり。槍ヶ岳の掌中に落ちたる水は、之れ高瀬川の水源地なり、大天井の掌中に落ちたるものは、やがて梓に合流す。

常念山塊の北端には燕岳あり、海拔九千一百尺、燕岳と大天井岳とを連接する連峰は屏風岳と呼ぶ。大天井の南に常念岳あり、海拔八千七百八十二尺、槍ヶ岳の頂上より一大ピラミットの如く見ゆるものは、即ち此峰なり、其の南に蝶ヶ岳あり。

常念山塊の北部は全山花崗岩たり、岩石土壤の純潔なる高山植物の絢爛と相反映して、其の美云はん方なし、新火山岩より成れる白馬八ヶ岳戸隠等とは高山植物の分布に多少の差異あるを見る。

吾が日本アルプス第三回の横断は、常念山塊を越え、全く人跡不到の地を辿り、槍ヶ岳を極めしものなり。

二 上途

雨雲低く垂れて四阿山の峰頭も仰ぐべからず、天候の變幻實に測られざるものありしも、日本アルプス第三回の横断を決定せんものと定め、ては矢も楯もたまらず、何時かは晴れんと頼みなさを頼みとして、高頭式氏と共に長野驛を發せしは八月十九日午前六時、川中島を過ぐ、犀川を渡り、右に茶臼山を眺め、左に西條山を望む、機山不識庵、兩雄の相争ひしところ、雲脚稍々、迅く萬頃の稻田、綠波目慳むるばかり。

元是英雄酣戰地 兩山雲合雨冥々 須臾雲散雨還歇

萬頃平田 粳稻青

詩 佛

篠ノ井、稻荷山を過ぎて、月に名高き姥捨に到る、停車場は觀月堂の上方、冠着山脈の中腹にあり。善光寺平を一眸にあつむ、豊野、吉田、長野、篠ノ



井屋代坂城、稻荷山の七停車場を伏瞰すべし、千曲川洋々として北に走る。

信濃なる千曲の川のさゞれしも

萬葉集

君しふみなば玉とひろはむ

冠着の隧道を過ぎ、麻績、西條を経て、明科驛に下車し、明科館にて結束旅装を整ふ。時恰もよし、中房温泉より客を乗せて來れる、馱馬あり、即ち之れに荷物を托し、大町街道を進む。信濃富士なる有明山、常念山、塊の連峰、或は雲中に入り、或は現はれ、常念の雄姿、大天井の壯嚴、笑つて我れを迎ふるが如し。遙かに信越境上に聳ゆる祖父ヶ岳、乘鞍、白馬の連峰に至りては、谷に千古の白雪を殘して、峰頭雲漢に出入せる様、其の景象の雄大なる、覺えず快哉を叫ばしむ。

路傍の松根に腰打ち掛けて、白馬の裏山越え、針木峠の險絶を語る時に

明科驛より前後して來れる二客あり、しきりに針木峠の所在を問ふ。此人々は之れより針木峠を越えて立山に登り、轉じて飛彈に入らんとする者なり。其の企圖の壯なるに比すれば、何等の準備なし。二三問答の末、其の山に關して全く無經驗なるを知れり。針木峠に關し問ふて曰く、信州より立山に至る間、案内人の必要ありや、途中宿屋ありや、路に毒蛇多きや、此等の愚問を發するの、人到底惡絶險絶を極むる針木峠を越ゆる能はざるべし。如何にして此壯圖を企てしかを尋ねしに、日本風景論を讀みて思ひ立ちしと、而して日本風景論を金科玉條と信ぜるが如し。

風景論には針木峠に關して左の記事あり。

信州口、信濃大町より野口村に至り、此所にて案内者を備ひ、且つ各種の準備をなし、針木嶺(海拔二、五九三米突)を超え、二股黒部を經ず、越(海拔二、五九八米突)を過ぎ、立山温泉に下り云々



記事簡にして談るところ何ぞ夫れ容易なる。針木峠は少なくとも三日分の食糧と露宿の用意となし、二三の案内者を率ゐざるべからず。余等疊に三人の夫を率ゐ、十分なる食糧を携帶せしにもかゝはらず、黒部の危難湯川谷の災厄を免るゝ能はざりき、然るに今何等の用意なく案内者の必要をも感ぜずして此難所を越えんとす、盲者蛇を恐れずとは、實に此人々の謂か。一時は其の無謀に驚きしも、寧ろ其の憐むべきを思ひ、懇切に針木峠の狀態と各般の注意を與へ袂を分つ。二客は大町に向ひ、余等は宮城に進む。

### 三 宮城

大町街道より左折して宮城に向ふ時、午前十時半なりき。午前十時四十五分高瀬川を渡り、又穂高川を渡る、陰雲漸く晴れて炎威

赫々、高山の生活に馴れては下界の苦熱に堪えず、槍ヶ嶽の雪を思ふこと切なり。  
十二時中房川を渡り、宮城に着す、路傍の一茶店に立ち寄り、六十前後の老媪と若き主婦内に在りたれども、不潔にして憩ふべからず、食ふべき物なしと云ふを幸にして急ぎ辭し去り、二三町を隔てたる中房浴客小荷物取扱所に至り、駄馬にて運び來りし荷物を托す、主人内山某接待頗る懇切、或は宮城中房間の地理を説き、或は四近の古跡を語る。相生屋にて午餐を喫す、相生屋は一農家庭前には馬糧とすべき乾草堆高く、籠室内に充つ、思ふに避難の地、行人稀なるを以て旅舎飲食店を以て生計を營む能はず、農桑の傍ら有明神社に賽する人、中房温泉に往復する浴客の爲めに室を貸し、食を供するのみ、素朴愛すべしと雖も、食粗惡にして食ふに堪えず。



庭前に高さ六尺内外の石碑あり、中央に有明山神力講社開闢行者梅本院惠純法印の文字あり。

相生屋を辭して進むこと二町にして、有明神社あり。殿堂は近年の新

築にして神寂びたる處なし、社側より左方に進み、安曇電燈會社發電所

附近より中房川に沿ふて登る。右に有明の青嶂を仰ぎ、左に中房の奔

湍を下瞰す。附近樹木大なるものなく、炎熱やくが如く、歩行頗る難む。

午後一時十五分、一溪右より來りて中房川に落つるあり、水清冽掬すべ

し。午後二時路二支となる。右は有明山頂上に達するものなり、之れ

より中房川の谷漸く狭まし。午後二時四十分、中房川を渡るところに、

危橋あり、數條の鐵條を以て橋板を鈎る、之れを渡るに搖々たり、曩に黒

部川の籠渡しにて懲りたる一行、戰々兢々として渡る、之れ、葵にこりて

階を吹く、類か、橋の長さ十間許、路喬木帯に入る、溪益々深く、兩岸の森

林鬱々積青、翳蒼して一に蒼然たり。

時未だ三時ならざるに既に日光を見ること能はず、仰て有明山の半峰

以上陽光の輝々たるを見るのみ。バイクワウレン多し、蘭科植物の

珍種數種を見る、石南の頗る巨大なる樹枝に、松羅の懸かれる等、喬木帯

の特想を現はせり、岩ウチハの一面に繁殖せる世の高山植物狂をして

見せしめなば、必ずや垂涎三尺すべし、岩ウチハは岩カボミに似たれど

も、其の花の形容色彩、彼に勝ること確に數等。

全山悉く花崗岩なるを以て、水特に清冽、清冽なる水邊シラヒゲサウの

満開せるあり、陰鬱なる喬木帯の内、其の花愈々純白。

午後四時、有明山の峰頭側面を樹間に仰ぐ、山下村落より望むときは、頂

上平坦にして芙蓉峯の頂に似たるも、此側面より仰ぐときは、鋭尖頭を

なし、山容の雄壯奇拔なる筆紙に盡す能はず。



午後五時三十分、左方より來れる一溪を渡りて路急坂をなす、信濃坂之  
 路傍に茅屋あり、獵師庄太郎の家なり、暫時此所に休憩し、庄太  
 郎に命ずるに、槍ヶ岳の先導たらんことを以てす、答て曰く、曩に足を傷  
 けたれば、其の任を完ふする能はず、然れども山麓に小林喜作なる者あ  
 り、山中の地理に精通せること他に比肩すべきものなし、明早朝下山し  
 て余等の先導たることを依頼すべしと、乃ち人夫數名、備入の件を託す。  
 人圈を遠く離れたる此溪間の一茅舎、何ぞ夫れ詩的なるや、其の生活の  
 詩趣に富める吾人をして羨望に堪えざらしむ。  
 思へ。

山姫が裳の色か、彩霞山腰に纏絡し、萬木の嫩芽薄紫にけぶるとき、深潭  
 に血潮を浸すヤシホの花、曆日なき深山に春を告ぐるものはたゞこれ。  
 驟雨新に晴れて、殘月峯頭に近く、溪流喧嘩の邊、杜鵑一聲、此谷を渡らば、

如何心なき樵夫も、豈斷腸の感なからんや。  
 新霜昨夜山頭を染め、織り出す蜀江の錦尾上に近く、妻戀ふ鹿の叫びを  
 聞かば、心なき野人も、秋のあはれをや悟らん。  
 棧道縷の如く、人圈に通ずる細逕も、積雪に埋れ、春花秋葉悉く玉屑の下  
 に眠るとき、紅血滴る、熊肉を炙らば、甌中の醴酒、其味果して如何。  
 春花長閑に開き、秋葉久しく輝く、此山里もあるものを。五慾の煩富貴  
 に憧れ、功名に悶ゆる世の人の愚かさよ。  
 空想にかられて、時の移るを知らず、榾火の一きは赤さに心付きて、茅舎  
 を出づれば、陰雲十重廿重に、中房の谷を埋め、さなきだに小暗き、喬木帯  
 の内今は早や、黑白も分かず、溪聲をしるべとして、中房温泉に着しぬ、時  
 に午後七時半、宮城より中房まで三里。



四 中房温泉

余等の中房温泉に達せしときは、浴舎の客室に燈火を見る。直に階上の一室に導かれぬ、内湯に入りて満身の垢汗を流し、室に歸りて衣を更め始めて蘇生の思ひあり。

中房の地海拔三千尺、中房川の清瀬近く浴舎の東を流るれども、水聲人語を亂だすに至らず、對岸有明山の積翠將さに廂檐にくづれんとす、北及西は屏風岳の峰嶺、南方の一帶のみ開濶なり、寒嵐冷雲、室に去來し、候三伏に屬すれども氣晚秋の如し。

五月及九月の雑沓期には浴客三四百名に達すと聞けど、時正に秋蠶繁忙の節、浴客の滞在せるもの五十名内外に過ぎず、客室多數、内湯及野外にある浴槽總て十七ヶ所と稱す、御座の湯、大湯は内湯の名あり、野外に

は瀧の湯、綿の湯、蒸湯等あり、蒸湯は他の温泉に多く見ざるところ、小浴室二棟あり、板を以て四圍を密閉し、床下に熱泉の沸騰せるあるを以て室内蒸氣充滿して白蒙々たり、蒸氣の過熱を防がんが爲めに青草を刈りて之を投し、其の上に横臥し、蒸氣浴をなすなり、戸を開きて内を窺ひば先に投じたる草葉皆腐爛して異臭鼻を衝く、驚いて戸を閉せり。

泉質清澄著しく、硫化水素の臭氣あり、開湯は弘化二年と聞けど、里人の口碑には延暦の昔、田村磨が惡鬼、魏石を討せしとき、此温泉に浴せりと、附近に合戰澤、田村薬師あり、又佐々成政が越中より信濃に入り、甲斐に赴く途、此地を過ぎて此温泉に浴せしと、彈正の湯は成政が從者の名によりて命ぜられしものと、所謂齊東野人の言にはかに信ずべからず。販賣部の設けあり、食品雜貨を鬻ぎて浴客の需用に應ぜり。販賣部の



小断に年十五六才なるあり、性質しく善く語る、余等の爲めに有明登山の先導を爲さんと請ふ、乃ち浴客中に同志を募りて十三名を得たり。

### 五、有明山

海拔二二六七米七千四百八十四尺

北緯三十六度二十三分十六秒一四〇四

東經百三十七度四十六分十五秒〇九五六

有明山は戸放ヶ山、信濃富士等の名あり。從來標高八千七十五尺と稱せられしも、其の頂上まで針葉樹の喬木帯に屬するを以て此高さに疑ひなき能はず。日本アルプスの諸峰を見るに七千尺にして喬木絶え、八千尺にして灌木絶え、草本帯は九千尺内外なるを見ればなり。近日精確なる標高の測定せられしを見れば、果して海拔七千餘尺なり。

八月二十日。

午前七時十分浴舎を出て南方に降ること二三町中房川の清瀬亂礁を飛んで渡り、對岸の林下榛莽を排きて登る。

喬木鬱々たる間に、蹻蹻の聲を聞く、垂澤の瀧之れなり。高さ十餘丈一ノ瀧、二ノ瀧、三ノ瀧の三段をなす、一ノ瀧は之れ百練の素練、二ノ瀧は之れ激澗として珠簾の如く、三ノ瀧の碧潭に落つるところ大沫激して狂電となり、小沫潏然として雲霧を爲す、風爲めに生じ、白雲爲めに舞ふ、花崗岩の峭壁濕ふて玉の如く、澗樹皆披靡す。

喬木の下に巨大なるシヤクナゲ多し、バイクワウレン、セリバワウレン、ミヤマモジズリ、フタバラン、コミヤマウツライ、イチエウラン等の植物多く、又羊齒類に富む。

登路には一合目毎に木標或は石標あり、三合目に達せしとき午前八時



半中房川の谷を隔て、始めて燕岳の絶頂を仰ぐ。幾十百年を経たる針葉樹の喬木立ちながら枯れて皮飛び肉落ち、中心木質のみ白色となりて鹿角の如きものを雑えたる老樹の間に聳立せる燕岳の絶頂に近く猛鷲の翱翔せるを見る。盛夏残雪ある峻嶺の頂さと猛鷲と何ぞ其の對照の妙なる。

垂澤瀧川上には殆んど飲料水なし、五合目に於て小溪の底僅に流水を認め、二三合目附近には樹木少く、六合目に及びて鬱林晝猶暗く、七合目附近路最も急峻、花崗岩の絶崖を蝸附猿攀して過ぐ、地獄谷と稱す。

午前十一時九合目に達す、喬木密接、天日を通らさず、絶頂に達せしは正午なりき。頂上は南北に長く、東西全く狭長、例へば利劔の刃上を渡るが如く、寸尺の餘地なし、小洞數個あり。

白雲漠々下界を鎖し、斷雲屢々四近の峰頭をこめて去る。白雲底裡、蛇

蛇として銀蛇の走るはこれ、穂高川か、はた高瀬の長流か。遙かに粉壁の聚落を見る、遠きは大町近きは池田の市街。灼爍たる明鏡は木崎中網の湖水にあらずや。蝶ヶ岳常念大天井屏風、燕岳の連嶂、斷雲の間より或は表はれ、或は隠れ、遂に其の雄偉なる全軀を看ること能はず。有明表山の西北に連なりて奥の院あり。東南僅かに表山に連接し、他は急峻なる絶崖をなす、恰も巨人の立てるが如く、壯絶を極む。

一行渴甚だしく、携帶せし水筒悉く空し。例の小断二三の水筒を携へて一方の岩下に去る、暫くして歸り來る、失望の色あり。彼の岩下常に清水の溜溜せるあり、然るに既に何人か汲み去りて、涓滴を残さずと頂上にあること一時間、一同前路によりて温泉に歸る、時に午後三時半。

六、燕岳



海拔二七六二米突九千百十七尺

北緯三十六度二十四分十三秒三八四〇

東徑百三十七度四十二分四十六秒五四七〇

本邦有數の地圖

何人の地理書にか燕岳の名を載せたるものありや。

本邦有數の地圖

にも此山を記さず此山名を知れる人尠なし。

燕岳……燕岳は如何なる山ぞ。山麓の里人は燕岳高さ一萬尺と稱す、

一萬尺に出入する高山は本邦有數の高山崇岳ならざるべからず然る

に世人に聞えざること如斯世人に識られざるは燕岳の罪か此靈山を

知らざるは世人の愚か夜光の璧も昆山にありては誰か其の名玉たる

を知るものぞ假令世人に知られざるも其の實質に於ては連城の價値

あり。余は燕岳が世人に知られざるが故に却て其の偉なるを見る。

東海の表に屹立する富嶽の秀峰其の名世界に遍く婦人小兒之れに登

り、跋者之れに登り自轉車の客之れに登る。斯くて余は益々富嶽の平  
凡を説かざるべからず。若し富嶽をして日本アルプスの背後に聳立  
せしめ吾等をして數日の露宿を重ね始めて須走に達し吉田に至らし  
め三歳に一人五歳に二人其の絶頂に登らしめなば富嶽の大は益々大  
に偉は愈々偉あらむ。天下に知られたるは富嶽の不幸にして世に聞  
えざるは燕岳の幸と云ふべし。

八月廿日午後有明山を降り浴舎に在りて昨夕信濃坂の庄太郎に頼み  
置きし人夫の來るを待つ人夫一同夜に入りて到着す乃ち登山の準備  
をなす。人夫六名一行總て八名露宿四回五日間の行程携帶品左の如  
し。

一 白米四斗 (一人一日一升宛)

二 味噌二ノ目



三、罐詰 二十二個

四、パン、ビスケット 十斤

五、氷砂糖 三斤

六、テント 一張

七、防寒用外套及毛布等

八、寒暖計、晴雨計、傾斜儀等

九、寫真器械

十、鏡物及植物採集用具

十一、草鞋 四十足

外に救急用品及雜具

八月二十一日

前夜の豫定によれば此日未明中房温泉を出發し正午燕岳の頂を極め





大天井を越えて二ノ俣に露宿すべき計劃なりしも何事ぞ雨雲低く、中房の谷を蔽ひ、細雨霏々たり。

失望……失望人夫を待つが爲めに昨日の滞在(爲めに有明に登る)をなし、今日も亦空しく一日を費さるべからざるか、吾は其の苦痛に堪えず、吾も人も交るゝ庭前に出て天を仰ぎて長歎するのみ。斯くて六時も過ぎ、七時雨益々降る、八時殆んど止み、九時出發す。

浴舎の傍らより細徑を辿る、二丁許りの間熊笹の密生せる間を上る、行くこと三丁にして樓霞瀧あり、其の少しく上方より左折して小溪を登る、濁澤と云ふ花崗岩を穿てる溪谷、水清冽なり、何ぞ夫れ名實相反するの甚だしきや。少しく渴を覺ゆ、一掬して口にすれば其の味澁きこと甚だし、驚きて之れを吐く。人夫曰はく、此上方温泉の湧出ありと。此の溪水一見清澄なれども、其の質汚濁を極む、濁澤の名始めて謂あり。



澤中を上ること又三丁溪を捨て、右方の崖を直進す、雑草の繁茂せる  
間僅に細徑を認むべし、路頗る急峻、此溪流を離るれば、燕岳屏風岳、大天  
井岳、常念岳、皆一滴の水をも得る能はず、人夫大に後る、喬木帯中に休憩  
す、時に午前十時二十分。

中房浴舎より高さこと既に六百六十尺、喬木の密林中には雑草少なく、  
只千古拂はれざるの敗葉、朽枝を見るを普通とすれども、此所の喬木帯  
にありては、身よりも高く、熊笹の密生せるありて、登攀意の如くならず、  
天益々暗く、雨再び来る、不知案内なる深山に入りて、恐るべき降雨、心中  
不安の念なき能はず。

午前十一時半、枯枝を集めて火を焚き、人夫の来るを待つ、待つこと四十  
分、人夫漸く来る、其の後れたる理由を質せば、案内者喜作、足を失して濁  
澤の潭中に落ちたるの珍事ありしと。午後一時、喬木帯を脱して、燕岳

の峰頭を見る。天壇既に咫尺の間に迫まれり、有明山の峰頭既に伏瞰  
すべし、三等三角點あり、高山植物多し、即ち

- ツガザクラ アオノツガザクラ ミヤマリンダウ オヤマリンダ
- ウ コバイタイサウ キングルマ ウメバナサウ イブキトシノ
- オ ミヤマシホガヤ タカネヒカデノカツラ ドーダンツ、チ
- ハクサンフウロ チングルマ ハヒマツ

等主要なるものなり。此所より燕の小舎まで殆んど二時間を費せり。  
途中羚羊の走るを見る、危険なる絶崖、走ること飛ぶが如し。高山植物  
盛に開花して、御花畑とも稱すべし、所數ヶ所あり。

余先登小舎に達せしとき、午後三時、小舎は偃松の枝にて作りし者、到底  
雨露を凌ぐべからず。附近にミヤマキンパウデの盛に開花せるを見  
る、タカネスミレ、トウヤクリンダウ、イハウメ、ウラシマツ、チ、コマクサ、



イハギ、ヤウ、ハクサンイチダ、タヤマキンバイ多し、タヤマキンバ  
 イは其の名を冠するにもかゝらず立山に於ては甚だ少く、其の繁殖  
 此地の如きは他に比なし、コマクサの如きも其の花の濃紅色を呈せる  
 八ヶ岳、白馬等の種類に比して一層鮮麗なり。  
 午後四時人夫悉く来る、二人の人夫は飯を炊ぐの雪を得んが爲めに谷  
 底に下れり、他の二人は薪を得んが爲めに峰に登れり、一人は雨露を凌  
 ぐべきテントを張り、一人は高頭氏と余とに扈從して燕岳の絶頂に向  
 ん。  
 露宿地の上方より四近の地勢を展望するに、東は中房川の谷にして山  
 勢頗る急峻を極め、大部分は鬱々たる喬木を以て蔽はる。谷を隔て、  
 有明山の連峰あり、俗に餓鬼岳と稱するもの、雄俊群を抜けり。北方は  
 脚下より連嶺起伏して燕岳の絶頂に終はる。西は即ち信越信飛の國

境、日本アルプスの連峰屏立し、槍ヶ岳、笠ヶ岳、鷲ヶ岳及び燕連峰と高瀬  
 川の谷を隔て、相對峙す。南は大天井常に連なる展望の雄大壯嚴、  
 筆紙の盡すべきにあらざるなり。而して猶ほ爰に記すべき一事あり、  
 そは燕岳が全山花崗岩よりなれることなり。中房川に面する方面は  
 前陳せるが如く、喬木帯を以て蔽はるゝが故に、一の見るべきものなし  
 と雖も、高瀬川に面する斜面は稍緩にして、木低く、草短く、山骨露出す、山  
 骨の裸出せるところ風化靈爛甚だし、靈爛して生ぜしものは雪をあざ  
 むく、石英の砂、風化に抗して残れる岩角、其の神鉞、鬼斧の痕奇絶怪、余  
 は未だ曾て如斯山の美なるを見ずと云へば、高頭氏は之れ甲州駒ヶ岳  
 に似たりと。  
 燕岳の頂上に達せしは午後四時四十分中房川の谷より吹き上ぐる濃  
 霧は實に奔馬の勢にて、轟然山頂目懸けて押し寄する様、怒濤の如し、頂



きに達すれば西方より来る烈風に吹き返され寄せては返し返しては再び寄する有様の壯快なるに恍惚として佇立せしをりしも余等の顔前に一大奇觀の現はれたるあり……

一大奇觀……そも何事。

白蒙蒙たる濃霧の内物あり神か佛か丈け三丈腰下漠として定かならず上躰判然七色の彩環其の背をめぐり頭部より陸離たる光芒の放射するを見るこれ所謂如來の御來迎なり。

此秀麗なる山上此異觀に接す美と云はんか麗と云はんか快と呼ばんか此際此時余等の感情を形容すべき文字なく言語なし衆感極まつて涙下る。

午後六時露宿地に歸る雪は山の如く薪も亦多數に運ばれたり一同協力小舎を完成す。日没の頃より天候頗る險惡濃霧は遂に雨と化し谷

間より吹き上ぐる烈風と共に斜に面を打つ蒼皇として一同幕中に入る夜に入るや寒氣特に甚だし。

八月廿二日

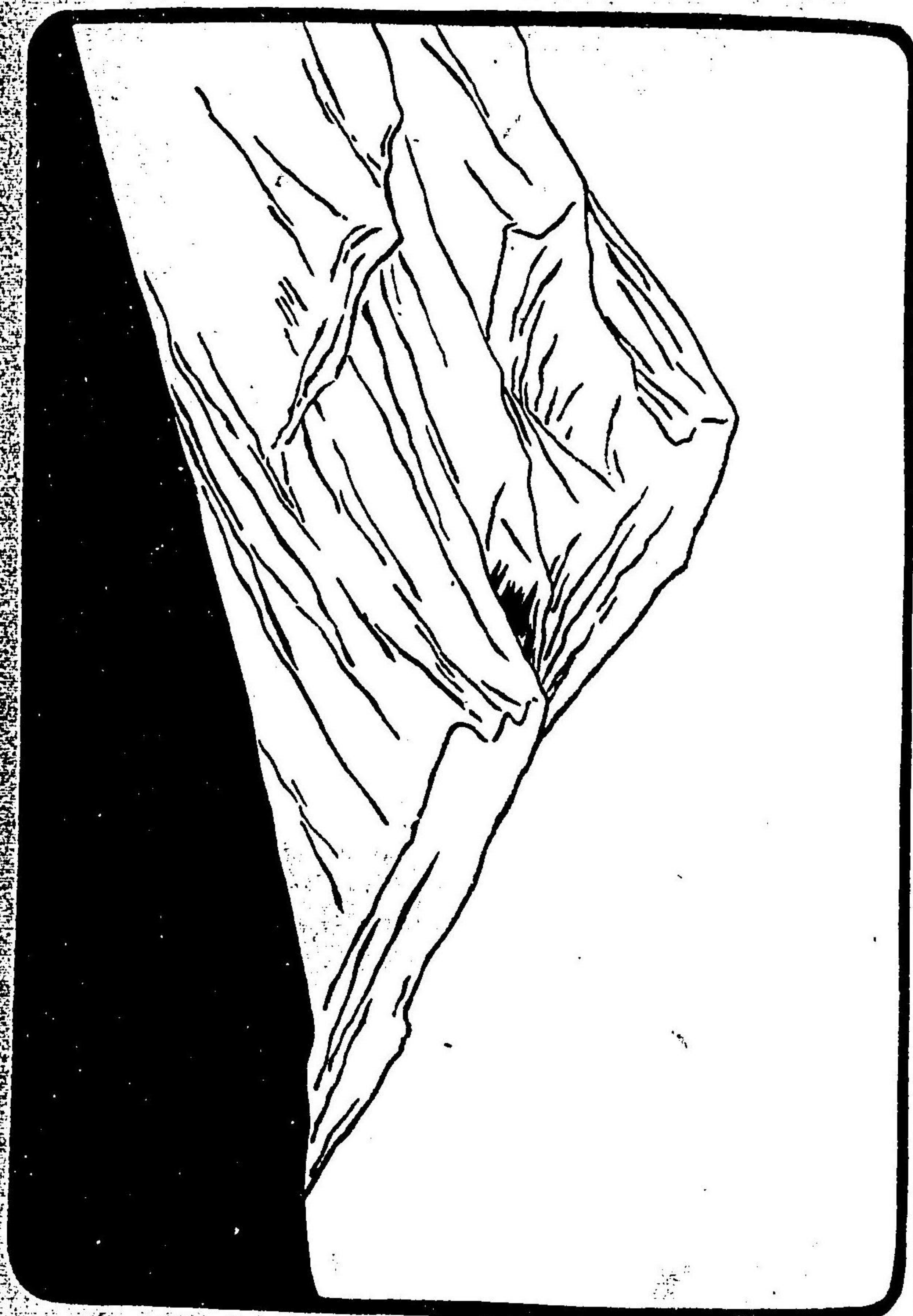
午前三時高頭氏先づ起きて火を焚く衆次て悉く起き各自分擔せる仕事に就けり。

午前七時出發愈々大天井に向ふ。

此日も朝來亦天候良しからず屢々濃霧の爲めに困難せり。燕岳より大天井に至る途中は昨夜の露宿地より燕岳に至りし地勢と同様にし屏風岳連嶂の頂上を渡ることなれば途中の有様千篇一律の感あり。即ち一方は急峻なる中房の谷他方は山勢稍緩なる高瀬川の谷其の峰に近きところに樹木草本少なくて山骨露出一面に花崗岩の風化より生じたる石英砂を以て蔽はれ其の間に高山植物の絢爛たるを見る。



其の美其の快云ふべからず。  
 一般に花崗岩の山は跌宕豪爽の雄姿あり其の色澤燦然其の質純潔なれば溪間の流水も清澄に太氣も亦清爽なるを覺ゆ。花崗岩の山は之れを四季にたとふれば春なり駘蕩和順萬物爲めに生きんとするの概あり。火山岩新火山岩の山は秋なり荒涼蕭殺萬物爲めに死なんとするの趣あり。花崗岩の山には希望の色あり火山岩の山には失意の觀あり。花崗岩の山には樂天家登るべく火山岩の山には壓世家行くべし。江山の洵美は花崗岩の山に於て之れを見る凄愴悒鬱は火山岩の山に於て之を感ず。花崗岩の山に登らずんば眞に山の美を知ること能はず。以上はこれ燕岳より大天井に至る途中の景色を見油然として胸中に起りし余の感概なり。



心野大井天大り山方景三



七 大天井山

海拔二九二一米突九千百十九尺

經緯度測定未済

屏風岳の連峰渡りつくして將さに大天井に移らんとするや山勢全く一變其の傾斜の急なる實に驚くべきものあり。全山壞崩せる岩石の大塊磊々落落々相重積し、一岩を踏めば忽ち動揺し、一岩動けば重積せる他岩も動揺す。其の危険多く見ざるところ、前に進めるもの一石を轉ずれば憂々として墜落し、後者の頭上を越えて深谷中に落ち、其の行くところを知らず、落下の途中岩に激する音響谷にひびき、峰にこたへし、ばしやまざる有様には、一行顔色なし。此行槍ヶ岳は實際豫想の大なりし如くならざりしに反して、大天井の雄渾は、何人も思ひ及ばざりし



ところなり。午前十一時、大天井の絶頂に達す。  
 四近の地勢を見るに、北は屏風岳の連峰によりて、燕岳に連なり。南は常念岳の雄偉を歴し。西は槍ヶ岳穂高に對し、東方有明を脚下に伏瞰す。西南に一手を伸ばして槍ヶ岳と握手せるところ、高瀬梓の分水嶺をなせり。一萬尺内外に入らせんとする四近の山々を睥睨するところ、實に日本アルプスの雄鎮たり。  
 此山を大天井と呼べる、何ぞ其の名の適切なる。此山を駒と名けんか、不可なり。槍と呼ばんも不可なり。立山白山笠鷲羽皆不可なり。大天井……大天井……實に奇想の天外よりおつるもの、此山勢の山にして始めて此名あり。  
 槍ヶ岳の眺望の如き、恐らく大天井の頂上より見たるの景に勝れるものなからむ。高瀬川の谷底より將さに天に達せんとする尖頭まで、一

木一草の之れを遮るなし、特に此方面の半腹には萬古不滅の殘雪多し、之れより峰傳ひに常念に向ふ進むこと一時間半、二ノ俣と稱するところに達す。

八 常念嶽 及び一ノ俣

海拔二六六一米突(八千七百八十二尺)

北緯三十六度十九分十一秒七一八〇

南經百三十七度四十四分十七秒七九八〇

二ノ俣には參謀本部測量部員の作れる石室あり、大さ十數人を容るべし。常念大天井燕岳附近にありて、雨露を凌ぐに足るは、只此石室あるのみ、他に露宿に適せるの地なきにあらざるも、水を得ること能はず、獨り此二ノ俣のみは、近き溪間に殘雪多し、特に此の溪には、今も猶ほ白骨



の散亂せるを見る。曾て山麓の某此地に來り、溪に下りて僵れたれども、其の屍を收むるの親籍縁者もなければ、人骨今も尙ほ此谷に残れり。嗚呼、此深山に入り、幽溪の内に白骨を見なば、何人も鬼氣の身邊に迫るを覺えん。

余惟ふに早朝中房を發すれば、正午燕の露宿地に達し、夕刻此二ノ俣の小舎に達するを得べし。然るに人夫の遅さが爲め、一日の行程に既に一日半を費せり、且つ前程を問ふに、槍ヶ岳の麓に達するに猶ほ二日を費し、三日目にあらざれば、其の頂を極むべからずと。槍ヶ岳の大天井より高瀬川の谷を隔て、前面に聳え、呼べば將さに對へんとするところあり。余心中平なる能はず、而して槍ヶ岳は人の多く登りしところのもの、廣く世人の知れるところなれば、必ずしも登山するを要せず、故に斷然意を決して衆に告ぐるに、之れより常念蝶岳を経て歸途に就

くべきを以てす。高頭氏切に其の不可を説き、本邦の名山槍ヶ岳を咫尺の間に眺め、踵を返すは甚だ腑甲斐なし、よろしく其の頂に達し、日本アルプス第三横断を完了すべしと。人夫も亦曰く吾等又一層奮勵努力行を倍して進まん、客若し吾等の内より一人の案内者を率ゐ、之れより直に常念に向はれ、一ノ俣の露宿地に下られなば、他の者は之れより直に一ノ俣に降り、露宿の用意をなすべし、然るときは明日の夕刻槍ヶ岳の麓に達せん、而して其の通路は全く之れ無人の境、何人も未だ全く踏破せざるの深山幽溪なりと。余は高頭氏の熱心なる勧誘と、人夫の言によりて決心を翻せり、余が日本アルプス第三横断を完了するを得たるは、全く氏の賜と云ふべし。氏は北越の富豪なれども、現代天下の富豪が徒らに安逸遊惰に耽る者と大に其の撰を異にし、特に山岳に對して趣味を有するは、殆んど其の天性に出づ、曩には巨資を投じて日本



山岳誌の編著あり、近くは山岳會を起して貢獻せらるゝ所多し、今夏日  
 本アルプスの横斷旅行は、終始氏と寢食を共にす、吾人の殆んど堪ゆる  
 能はざる數日の露宿にも、晏如として曾て一言其の苦を曰はず、克く困  
 難に堪え不足を忍び、山岳に對する研鑽大に得る所あり。  
 午後二時、二名の入夫を率ゐて常念に向ふ、常念の雄姿目前に聳ゆるも  
 起伏連亘せる連嶺を渡ることなれば、心のみ急がれて足進まず、白雲濃  
 霧漸く多く、四近の峰頭白雲の爲めに蔽はるゝこと屢々なり。横尾通  
 りより落日を包める斷雲の間に槍ヶ岳を仰ぎしとき、如何に其の景の  
 雄大なりしよ、常念の頂近く進みしときは、濃霧四方を鎖し、全く四圍を  
 展望するごと能はず、よつて止むを得ず、中途より一ノ俣に下るに決す。  
 一ノ俣の露宿地は常念岳西北の一大溪谷と、一ノ俣溪谷との合點、喬木  
 鬱蒼たる谷底にあり。此大溪上方にありては、二支をなせり、吾等の一

行は左右何れの谷をか降らざるべからず、而して左方の谷は距離甚だ  
 近きも、絶崖多くして降るべからず。右方に降らんとすれば、甚だしく  
 迂回せざるべからざるのみならず、途中に偃松多し……偃松……偃松  
 ……吾等登山者の前途を防碍する偃松は、之れ旅順に於ける鐵條網な  
 り、しかも遠望するときは、綠氈の如く、その上を行くこと易々たるの感  
 あり、故に經驗に乏しき登山者は、此偃松に入りて意外の困難に遭遇す  
 ることあり……ゆめ偃松帯に入るべからず。  
 二ノ俣の小舎を出でしより、殆んど途と稱すべきものなかりしも、此所  
 までは時々人跡の認むべきものあり、之れより槍ヶ岳に至るの間、全く  
 無人の境、唯地勢の難易を判じて、其の易きに就かざるべからず。今日  
 前に投ぜられたる一問題は、偃松に入らんか、絶崖に就かんか、二者其の  
 一を撰ばざるべからず。時に午後四時半、一度其の方向を謬らんか、幽



溪の間に日全く暮れん乃ち衆に告げて曰はく、  
 偃松多き右方の溪谷は迂廻すべからず左方の絶崖も降る能はず此兩  
 溪の間に介在せる山稜を下るべし偃松ありと雖も多からず行け此所  
 より一直線に彼の谷底に向つて、  
 高山植物の今を盛りと咲き亂れたるを足下に蹂躪して直下す忽ち偃  
 松の鐵條網中に入る始めは幹枝共に低く地上に偃塞せるを以て其の  
 上を渡るに左程の困難をも感ぜざりしも下方に降るに従つて漸く高  
 く地上を距る三四尺のところにて枝極縦横に錯綜し彈力に富める枝  
 條の爲めに反撥せられて眞逆様に投げ出だされしこと再三辛うじて  
 左右兩溪の合流點に達す。昨朝濁澤の溪流を離れてより爰に始めて  
 流水を見る水に渴せる一行面を水中に浸して飲む午後五時半豫定の  
 露宿地に達す。

二ノ股にて左右に別れたる人夫は早く既に此地に來りて露宿の準備  
 十分なるべしと豫想せしに森々たる喬木天を蔽ふて薄暗き溪間森閑  
 として人の氣配だになし彼等は中途にて道を失せしにあらずや此幽  
 谷の内彼等と相失するときは吾等は一粒の食なく一襲の防寒衣なく  
 飢餓の運命を免るゝ能はず。一同憂色あり乃ち人夫の一人をして彼  
 等の來るべき方向を探らしむ待つこと四十分一行悉く來る時既に遅  
 きを以て急ぎ露宿の用意をなす忽ちにして雨露を防ぐべきテントは  
 張られ風を防ぐべき障壁成り軟草を積みて柔かさベツトを作り薪は  
 之れ無盡藏飯を炊ぐべき大鍋は猛火の上にある。  
 衆焚火を圍みて談笑恢譁百出一時間前の憂愁は雲散霧消歡喜の狀喧  
 騒の態無人の深澤中の生活とは思はれざるなり。境遇の變心機の轉  
 何ぞ夫れ迅速なるや。



此露宿地の傍らに會て何人かの露宿せしと思はるゝ跡あり又一抱へもあらむと思はるゝ縦及トウヒの地上三四間ばかりの處より切り取られたるものあり此人跡不到の地に既に露宿せしは何者ぞ斯る大木を彼の高處より切り去るが如きは殆んど人間業とも思はれず衆怪みて止まず。

人夫の一人頗る得意の色あり其の由來を語りて曰はく今春二三の獵犬を伴ひ蝶ヶ岳より常念附近をあさりたれども運悪しく一の獲物だになく犬も吾も倦み果てたれば下山せばやと思ふ折りしも遙かに現はれたる一個の羚羊犬は眼敏く之れを認めて跳り出てぬ吾れも右手に銃を提げたるまゝ逐ひかけたり今こそ天日を蔽ふて晝猶ほ暗き喬木帯も當時は積雪に埋められ谷も尾上も一面の銀世界行手を遮る荆棘無れば峰と曰はず谷と曰はずひた走りに走りぬ犬運きにあらず我

も亦後れざりしも羚羊は弦を離れたる矢の如く其の速なること疾風の如く遂に其の影を見失ひぬ時既に黄昏目的物を逸しては疲勞一時に發じ家路に歸る勇氣も失せ此谷間に下り雪上に現はれたる喬木を切り倒し枝を柱となし皮を以て屋根を葺き一夜を明せり幾丈ともなき積雪の上に火を焚きて露宿せしことなれば一夜の中に六七尺も陥入し却つて寒さを覺えざりき狼籍たる古小舎の材料は當時のものにして雪上にて切りたればこそ地上四五間の所にて此喬木を切ることを得たるなれど獵師の快談に時の移るを知らず盛んに火を焚き一同テントに入りて眠る。

九 無人の境 坊主の小舎

八月廿三日。



午前六時一ノ股の露宿地を出發して一ノ股の溪間を下る。或は石上を飛び或は水中を渉る水冷かなること水の如く呼吸悉く霧となる。

一ノ股の溪流は槍ヶ岳より發源する梓川の上流に合流するものなるを以て此溪を下るときは槍ヶ岳登山路に出づることを得るなり。然れども此溪の下方には、二個の瀑布ありと聞けば下る能はず。露宿地より下ること一時間許り右方水なき小溪を上らざるべからず頗る急峻を極む小溪登り盡せば一ノ股及び二ノ股の分水嶺をなせる山稜に出づ。之れより又水なき小溪を下る下ること二三町にして流水あり、二ノ股の一ノ澤と稱す。

一ノ俣を下りて午前八時三十分始めて二ノ股の溪流に出づ。

二ノ股の溪流を下ること二時間槍ヶ岳より來る梓川との合流點に出づ。其の水量二ノ股の溪流と大差なきを以て余は意外の感となせり。

梓の水斯くの如く少くなくば槍ヶ岳既に遠きにあらざるべし。

上高地方面より槍ヶ岳に登るものは皆此地に來り之れより梓の源流に沿ふて登る溪盡くるところ即ち槍ヶ岳なり。積に人の足跡あり古草鞋焚火の趾しきりに人の往復せしを證せり。常念より至き人跡なきの地を辿り爰に始めて人跡を見る此深山幽溪も既に人里に近づけるの感あり。時尙早しと雖も前途に休憩すべき好地點少なきを以て一同晝飯の用意をなす。槍ヶ岳の頂を極め再び此地に來るを以て米糞草鞋等の残れるを傍らの樹幹に結び付け正午愈々槍ヶ岳に向ふ。

溪流の右方に付きて進む喬木帯に屬する草本盛なる發育をなして全く路を埋め葉末の露繁くして衣袂皆濡ふ路凹凸甚だしく石塊磊々たるところ落葉枯草之れを覆ひ行歩困難屢々蹉跌し脚を傷け完膚なし。

午後一時途少しく開濶するところあり遙かに望めば溪谷の谷まると



ころ一大障壁あり。峰には白雪の皚々たるあり山腰白雲の搖曳を見る。其の左方に方りて一劍碧空を裂ける槍の峰頭英姿颯爽四近を壓し我が心臓の鼓動を禁ずる能はず人の槍ヶ岳紀行を見るに此附近より彼の英姿を仰げるを聞かず心窃かに之れを異とす。午後一時十五分右に赤岩の絶壁を見る午後一時半赤澤の小舎に達す例の岩小舎にて大サ十四五間もあらんかと思はるゝ大石の北方に樹枝を差し掛け間口三間奥行二間ばかりの所に起臥することを得べし。槍ヶ岳登山者の多くは此小舎に一泊し翌朝絶頂を極むと聞けども上高地を出發せば必ず頂上に近き坊主の小舎或は殺生の小舎に宿泊して翌朝早味頂上を極め下山すること最も策の得たるものと云ふべし。れ。暫時休憩して進む。笹を分け草を踏み踏み行くこと七八町左折して

礫に出づ。溪間所々に残雪あり氣温著しく低下す高山植物の美山容の偉將さに之れより始まらんとす。左方の懸崖幾千仞所々に瀑布のかゝれるあり前面を望めば残雪多き連障前途を遮る右方には黒褐色なる岩壁高く聳ゆ残雪のほとり高山植物盛に開花す。紅實にして紫花なるもの之れニバナイチゴの灌木にあらずや、ミヤマキンバウグ、ミヤマキンバイの鮮黄ハクサンフウロ、タカチバラの淡紫、ダテヤマウツボの濃紫は之れ艶にして麗なるもの採集及び撮影に時の移るを知らず。嗚呼虎穴に入らずんば虎子を得ず逆鱗に觸るゝを恐れなば焉んぞ龍領を探るを得んや百難を排し萬苦を経て始めて此天の樂園に逍遙するを得たり。蓋し天下の至美至奇毎に艱難危険の地であり獨り高山植物の美のみにあらざるなり。



午後三時十分溪谷左折し前方に一大残雪を見る長さ三四町巾一町許  
 り之を上高地より槍ヶ岳の頂上に至るの間に於て見ることを得べき  
 残雪の大なるものなり。然れども之れを白馬岳等の大残雪に比すれ  
 ば素より云ふに足らざるなり雪の附近最高山植物多し。  
 雪上を登ること半ばにして坊主の小舎と思はるゝ附近より盛んに白  
 烟の登るを見る意外……意外今夜吾等の宿泊せんとする坊主の小舎  
 既に何人の占居せるあり坊主の小舎は八九名を容るゝに過ぎざる石  
 室のみ吾等の一行八名若し何人か既に小舎にありとせば殺生の小舎  
 に行かざるべからず殺生の小舎は四五名を容るゝのみ去れば一部は  
 今夜露宿をなさざるべからず如何に防寒の準備あるも既に峰頭近き  
 ところ又大残雪の附近到底露宿をなすに適せず心切かに之れを憂ふ  
 加之ならず人夫の一名遙かに後方の谷底を指して叫べり……來れり



心切を感念する人夫の通尾廣



……來れり……四個の黒點蝨爾として動けり、望遠鏡を出だして伏瞰  
 するに正さしく五名の登山隊なり。千客萬來……吾等の一行八名次  
 て來るもの五名坊主の小舎に若干合せて或は二十名内外の一群愈々  
 宿所の困難を來たせり。  
 下より來る一行中の一名他に先立ちて來る、登攀頗る迅速。  
 余等は全く雪上を通過し稍々急峻なる斜面を登ること二三町午後五  
 時始めて坊主の小舎に達す。小舎の附近は一面に圭确たる大石小石、  
 小舎と云ふも只名のみにて數個の大石の堆積せる間にある自然の間  
 隙入口は東南にあり頸を縮めて漸く入るべし。余先登小舎に達し窟  
 内を窺ふに白烟蒙蒙として入るべからず外より呼べば答へもせずし  
 てノソリと現はれ出てたる大男色黝黒にして一癖あるべき面魂…  
 窟内に在る者は槍ヶ岳登山者の一行なるべければ出て來る者は吾等



の如き好事家か、さなくば白面の書生ならんと豫想せしに、これは又意外にも、恐ろしげなる山男覺えず後退すること二歩……三歩。然るに又意外にも、彼れは余等の一行を見て喜色满面、應對懇切、丁寧を極む、彼れは陸地測量部員に従つて此地にあり、天候不良の故を以て、測量意の如くならず、豫定の日數にて下山すること能はず、用意の食糧缺乏を來たし、數日來一同粥を啜り、副食物は全く絶へ、僅に飢を凌げる有様、余等を見て地獄で佛の感ありしならん。

既にして後より來たりし五名の一行も到着せしに、これ亦奇遇。高山跋渉家の一人、第四高等學校の林教授及長野中學生南條某、島々小林區署員及人夫二名なり、林教授とは初對面なりしも、既に互に其の名を知れるものから、一見舊知の如し。石窟に在る測量員の一行は、人夫五名、測量員一名、林教授の一行五名之

れに吾等の一行を合すれば、實に十九名の大數、仍て林教授の一行は止むなく二町許り上方なる殺生の小舎に行き、吾等の一行は此小舎に宿することとせり、小舎の附近に獵師の捨てたる獸類の白骨散亂せり。槍ヶ岳の鋭鋒既に目睫の間に迫まれり、小舎の左方にて撮影すること

二三。

薪を得んが爲めに、人夫の偃松中に入るや、二羽の雷鳥を發見し、石を投じて捕らへんとせしも、遂に逸せり。時に天油然として雲を起し、雨沛然として至る、雷鳴轟々、脚下に響く、衆驚きて石室に入る、雜沓言はん方なし。

石室の内、岩罅を漏るゝ風寒く、夜寒峭、料短、夢屢々破る、乃ち窟外に出づ、宵の雨雲全く晴れて、闌干たる星斗を見る、萬籟全く絶え、大靜大寂、吾れは一萬年の太古にかへりぬ。



十 槍ヶ岳

海拔三一七八米突一萬〇四百八十九尺

北緯三十六度二十分二十秒〇一九四

東經百三十七度三十八分五十二秒一〇七六

八月廿四日。

天明を待ちて一行絶頂に向ふ、余獨り一名の工夫を率ひて右方の懸崖に登る之れ峰頭を撮影せんが爲めなり。峰は實に天下の奇、我れに絶世の好印象なかるべからず、光線の方向と、四近の地勢を察するに、撮影すべきの個所唯一あるのみ、しかも險絶登攀容易ならざる絶壁なり、虎穴に入らずんば虎兒を得ず、即ち危険を犯して登り、數葉を撮影す。果して天下の逸品。

此所より大天井を撮影せしものも亦尤物たり。再び絶崖を下りて殺生小舎の附近に出て一行の後を逐ふ、兎角して槍ヶ岳峰頭の左方鞍背の如き山稜に達す、前面を俯瞰するに白雲濛々たる蒲田の深谷。愈々絶壁を攀ぢて峰頭に達せんとす、堅硬花崗岩にも劣らざる石英班岩の大塊、天地混沌の昔より頑として自然力の浸蝕に抗すれども、幾百萬年の昔より剝削の間も、不斷の勢力を以つて作用する風化の力は驚くべし、此堅岩に縦横無盡の裂罅、漫りに岩角を踏まんか岩と共に墜落すべし、漫りに岩角を握れば手に従つて崩落す、其の危険名状すべからず。然れども突兀たる峰頭は二三百尺に過ぎざれば、須臾にして絶巔に達するを得たり。若し此峯頭をして、高さ此三倍……四倍……五倍七倍あらしめば、何人かよく中途に於て膽沮み、眼眩して墜落せざるものぞ。



槍ヶ岳の尖頭は傾斜殆んど四十五度、吾人の登攀することを得る極度の傾斜なり。故に若し其の傾斜に一度の急を加へなば全く二手類の登攀を許さず、絶頂は廣さ四坪内外に過ぎず、一同縋かに立つことを得たり。

今や目前に擴げられたる一大パノラマ、日本アルプスの各峰悉く脚下に羣拜す、地上の森羅萬象皆鞋底にあり、胸宇宏快、意氣高邁、恍惚として人事を忘る。

北方遙かに立山群峰、白馬の連山を望み、近くは鷲羽の峰嶽に對す、東は常念山塊なり、淺間、八ヶ岳は白雲の内に入り、富士も遂に其の麗容を拜せず、南方に聳立せる穂高乗鞍御岳あり、西方蒲田の谷を隔て、笠ヶ岳の靈峰中腹以下白雲の纏綿せるあり、遙かに加賀の白山を雲烟眇漠の間に見望む。余曩に白馬にありて、日本アルプスの連峰を北方より眺め、

立山に登りて之れを西方より望み、大天井の絶巔に立ちて之れを東方より眺め、今槍ヶ岳の尖頭に立ちて之れを周圍に俯瞰す、若し夫れ一度御岳に登りて之れを北方に望むことを得ば、始めて北部日本アルプスの全豹を語るを得んか。

始め谷底に凝滞せる濃厚なる曉霧混沌として動かざりしが、見る／＼鼎沸躍つては白濤となり、銀波となり、天地を浸涵せずんば止まざる有様、千山萬岳今は早や霧海に浮べる群島の如く、遠山近溪漸く模糊たり、大江の長堤を壞りし勢にて押し寄する雲の波、いかで槍をのみ残すべし、高瀬の谷より吹き上ぐる一陣の颶風霧を卷きて岩頭に吼ゆ、次て來

るものは百萬白馬の大軍。天地全く白盡。一同峰を降りて先の山稜に來り、爰にて蒲田に向ふ林教授と別れ、附近の採集を試む、チヨウノスケサウの稀品を始めとして得るところ甚だ



多し、クモ、マ、グサ(少数)デム、カ、デ(多数)等の植物名が從來發表せられたる  
槍ヶ岳植物目録中に見えざるは余の異とするところなり。  
午前九時坊主の小舎に歸へり下山の途に就く。

播隆上人

石室の上に一小碑立てり、鎗ヶ岳の開山播隆上人の名を刻せり。實に  
播隆上人こそ突元雲漢を摩せる此鎗ヶ岳に初めて登攀せし聖僧なり。  
此石室を坊主の小舎と稱するも、其の由來は此聖僧が始めて發見せし  
によるなり。されば鎗ヶ岳紀行に此聖僧を記述するは全く無用の事  
にはあらざるべし。播隆上人は諸國修業の途中、飛彈より鎗ヶ岳の秀  
峰を見て登山の念を起し、文政九年美濃路より信濃に入り、松本を経て  
山麓小倉郷に來たり、中田某をして案内せしめ、全く人跡なき深山幽溪  
を辿り、首尾よく目的を達せり。坊主の小舎は此際發見せしものなり、

後文政十一年七月大坂にて鑄造せしめし彌陀の尊像を携へ來り、鎗ヶ  
岳に再度の登山を企て、峰頭に小祠を建て

阿彌陀佛(銅像)

觀世音菩薩(銅像)

文殊菩薩(木像)

の三體を奉安したり、天保四年の秋又々登山をなせり、其の後此靈峰に  
鐵鎖を懸け、登山者の便を計らんとして、各所の善男善女の喜捨により  
て作れる鐵鎖を運び來たり、時に凶歲打ち續きしかば山麓の人民は  
上人の登山に反對し、幾多の迫害を爲したれども、上人は百折屈せず、遂  
に天保五年鎗ヶ岳の尖頭に鐵鎖を懸垂せり、其の際又座像釋迦牟尼佛  
(銅像)を安置せり、之れより此靈山に登攀するもの續々たり。



十一 宮川の池

午前九時坊主の小舎を出發して前路を取りて下山す。午前十一時二十分前日晝食をなせし二ノ股の合流點に來る、暫時休憩して上高地に向ふ、午後一時十分横尾の小舎に達す、此間はずより道と稱すべきものなし、梓川の流に沿ふて比較的歩み易きところを下るなり。時に斷崖を横過せざるべからず、時に氷の如き水中を徒涉せざるべからず、時に粗の如き石上を飛躍せざるべからず、特に困難不快なるは例の根曲がり竹の密叢なり、然れども川に沿ふて下るのみなれば路を失するの憂もなく、既に人々の通過せし痕跡多ければ一も憂慮すべき點なし、人跡なき峻嶒幽谷を跋涉せし身には寧ろ平凡にして坦々たること砥の如しとや云はまし、霧の晴れ間に一大岩障を仰ぐ、横尾の屏風岩之れ

なり、午後二時徳佐澤に出づ、此所より上高地を経て島々に達する林道あり、路巾約六尺平坦なり、午後二時半林道より右方の礮に下り、宮川の池を見る。池は彼の上條嘉門治の小舎より一町許りの所にあり、相連続すれども一ノ池、二ノ池、三ノ池あり、一ノ池最も大に、二ノ池之れに亞ぎ、三ノ池最も小なり。水清冽、池中大小無數の奇岩怪石散在し、稍々見るに足ると雖も、之れを陸前松島の趣きありと云ふに至つては過賞と云ふべし。余は仰いて穂高の雄姿を看伏して、此池を見る、何ぞ其の平衡を得ざるの甚だしきや、彼れは飽まで雄大に、之れはあまりに纖巧なり、宮川の池は畢竟箱庭的泉水のみ。再び嘉門治の小舎に至り、暫時休憩す、嘉門治は一老獵師、夏は此地に嘉魚を漁し、冬は四近の山に入りて獸を逐ふこと三十年、槍ヶ岳附近の地



理に精通せること此老人に及ぶものなしと云ふ二三の奇談を耳にし  
たれども人の槍ヶ岳紀行中に屢々記されたるもの重ねて記するの要  
なし小舎を辭して上高地に向ふ。  
横尾附近より此邊一帶喬木蔭鬱たる平地なるを以て牛馬二百頭内外  
を放牧せり午後四時三十分上高地温泉に達す。

### 十二 上高地温泉及び徳本峠

上高地温泉は梓川の流域所謂上高地平原の中央にあり。附近一帶盡  
猶ほ暗き喬木林たり海拔約五千尺と稱す。東南に霞澤山徳本峠。西  
南に焼岳硫黄岳。北に穂高の峻嶺を仰ぐべし。故に展望廣からずと  
雖も眺望の豪壯多く其の比を見ず。温泉は文政年間創設せしもの  
なれども永く荒廢して何人も顧みざりしが近年上高地温泉株式會社

の組織せらるゝや梓川の岸に近く浴舎を新築し規模稍々大なり諸般  
の設備未だ十分ならざるを以て萬事不便を免がれざれども浴客多く  
出入するに至らば交通の便益々開け槍ヶ岳登山者の爲めには最も主  
要なる位置を占むべきは此温泉なるべし。  
泉質の清澄と浴槽の新らしきとは心氣の爽快を覺えたれども建築半  
ばの二階吹き抜きの天井菓子砂混りのパン魚は二三寸許の嘉魚三  
尾酒は一滴もなしと云ふに至りては啞然たらざるを得ず如何に僻陬  
の地と雖も草鞋と酒とはあるものを。  
八月廿五日。  
午前六時温泉を辭し島々に向ふ。七時十五分林道に達す之れより足  
趾漸く仰ぐ路の右方に柚小舎を認む行くこと數町徳本峠の麓に達す。  
峠の半腹より穂高を望む白雲搖曳して半腹を繞り殘雪朝暾に映じ